文部科学省
地(知)の拠点

平成２５年度採択　文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成

平成２９年度
事業報告書

国立大学法人 小樽商科大学

目 次

外部評価報告書

平成２９年度ＣＯＣ事業外部評価結報告書 …… 1

活動履歴 …… 21

プロジェクト成果報告書

① 小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト 24

② 地域活性におけるふるさと納税の検討 25

③ 外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト 26

④ 地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」 27

⑤ 地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性 28

⑥ 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化 29

⑦ 北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化 30

⑧ 後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究 31

⑨ Lost in Translation? 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サーヴィス」の課題とその克服 ― 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」(日本語・英語) 作成を含めた解決策提案も視野に入れて 32

⑩ ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析 33

参考資料

グローカルプロジェクト推進公募要領 …… 34
プロジェクト評価シート見本 …… 39
プロジェクト成果物見本 …… 41

平成 29 年度ＣＯＣ事業外部評価報告書

はじめに

小樽商科大学のＣＯＣ事業においては，年間を通じて外部評価委員との意見交換及び情報共有が行われており，外部評価委員の提言から大学の対応までのサイクルが短く，リアルタイムで進行する自己点検評価及び外部評価方式である。この方式は，初年度の外部評価委員会において，「すでに終わった取組について，年度末の委員会で報告を受けるのみでは，実質的・効果的な評価が難しい。年度末に一回だけ集まるのではなく，年間を通して意見交換及び情報共有をすべきである」と提言したことによるものだが，本事業の外部評価における大きな特徴である。

平成 29 年度は本事業の最終年度であるが，この特徴ある外部評価方式を活かし，外部評価委員の任期である【平成 30 年３月 31 日】までに，つまり，事業期間終了と同時に外部評価報告書を完成させるよう取り組んだ。事業の最終年度に，このような外部評価方式が実現したことは，小樽商科大学のＣＯＣ事業が適切に実施されたことの証左といえよう。

以下，平成 29 年度の調書に記載した取組計画を基に，小樽商科大学のＣＯＣ事業の達成状況を評価する。

平成 29 年度調書の計画に基づく事業評価

【計画１】

インターリージョナルな人材を育成するための教育活動の実施

１年次必修科目である科目群「知（地）の基礎」により地域に係る初年次教育を実施するとともに，Blended Learning による実践的な語学教育を推進する。また，予定を前倒しして平成 27 年 10 月に設置したグローカルマネジメント副専攻プログラムについては，所属学生に実施したアンケート等を活用し，今後の発展・拡充に向けて検討を進める。

【計画１】の評価を実施するにあたり，まず外部評価委員から大学に投げかけた問いは，**「『インターリージョナル』と『グローカル』の違いは何か」**である。グローカルという言葉は，国内ではインターリージョナルよりも一般的に浸透している言葉だと思われるが，この問いに対する大学側の回答は，次のとおりである。

○　「glocal」は元々「global」＋「local」の和製英語であり，最近は国際的にも通じる英語になってきているが，申請書作成段階では，例えばヨーロッパやアジアなど，国際

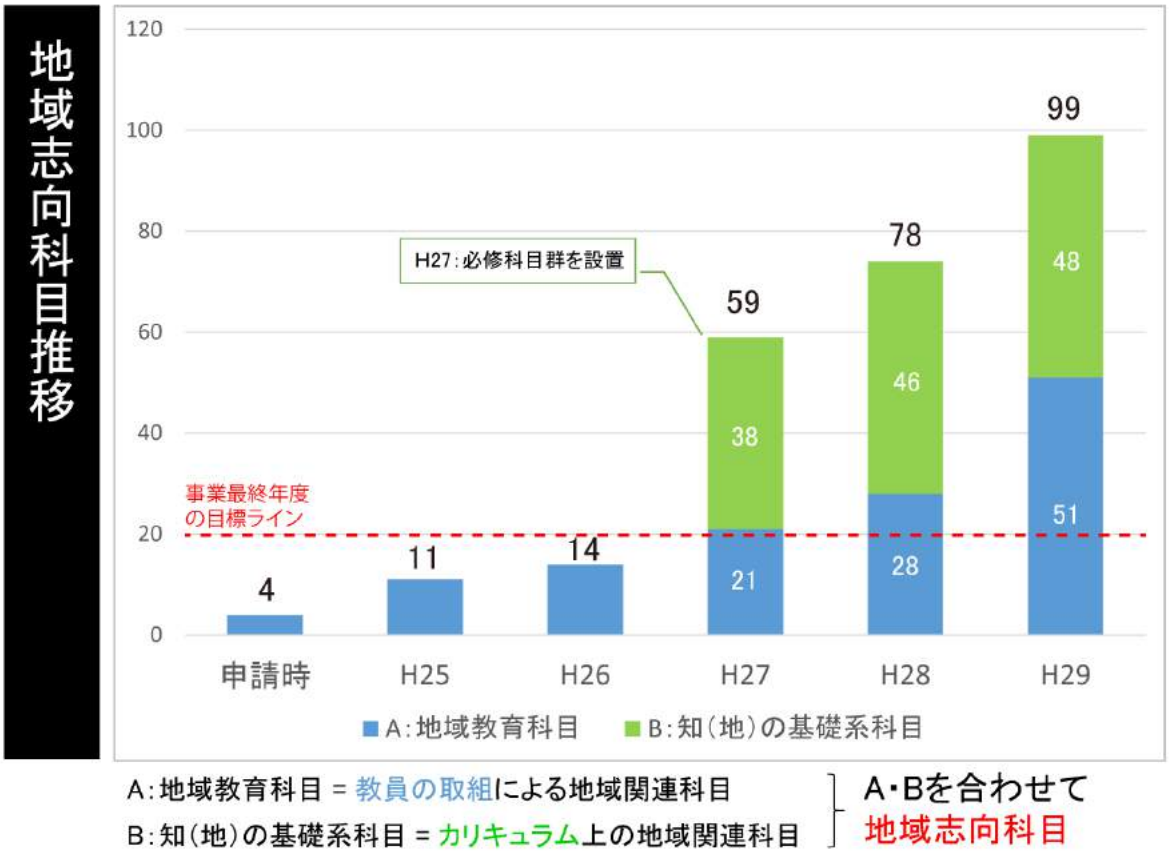
的に通用する英語は「interregional」だと考えていた。

○ この２つの言葉を明確に切り分ける定義はないのかも知れないが，グローカルは，ローカルで学びながらグローバルな視点を持ち，将来的に「世界」を相手に活躍するという一種の＜理念＞のようなものである。申請書におけるインターリージョナルという言葉を用いたのは，壮大だが漠然とした「世界」を掲げるのではなく，＜具体的＞な地域同士の関係の中で，＜具体性＞を持った活動ができる人材を増やすという意味であった。

○ グローカル人材もインターリージョナル人材も，国際的な視野と地域の視点を併せ持つ人材であるが，インターリージョナルに関しては，軸足は地域に置き，視点は世界に向け，幅広い知識を持って地域と地域，地域と人の「橋渡し」ができるような人材といえる。

以上を踏まえて，教育に係る【計画１】について評価を行うと，国際的な視野と地域の視点を併せ持つ人材を育成するにあたり，語学教育においては，Blended Learning の推進により，デジタルコンテンツ教材が順調に増加しているほか，大学独自の奨学金に基づく海外留学が実現している。特に地域教育においては，地域志向科目を申請時の４科目から20 科目に増加させるという事業当初の目標に対して大幅に増加しており（図１），ＣＯＣ事業の推進に伴い教育改革が進んだ事実が明確に確認できる。

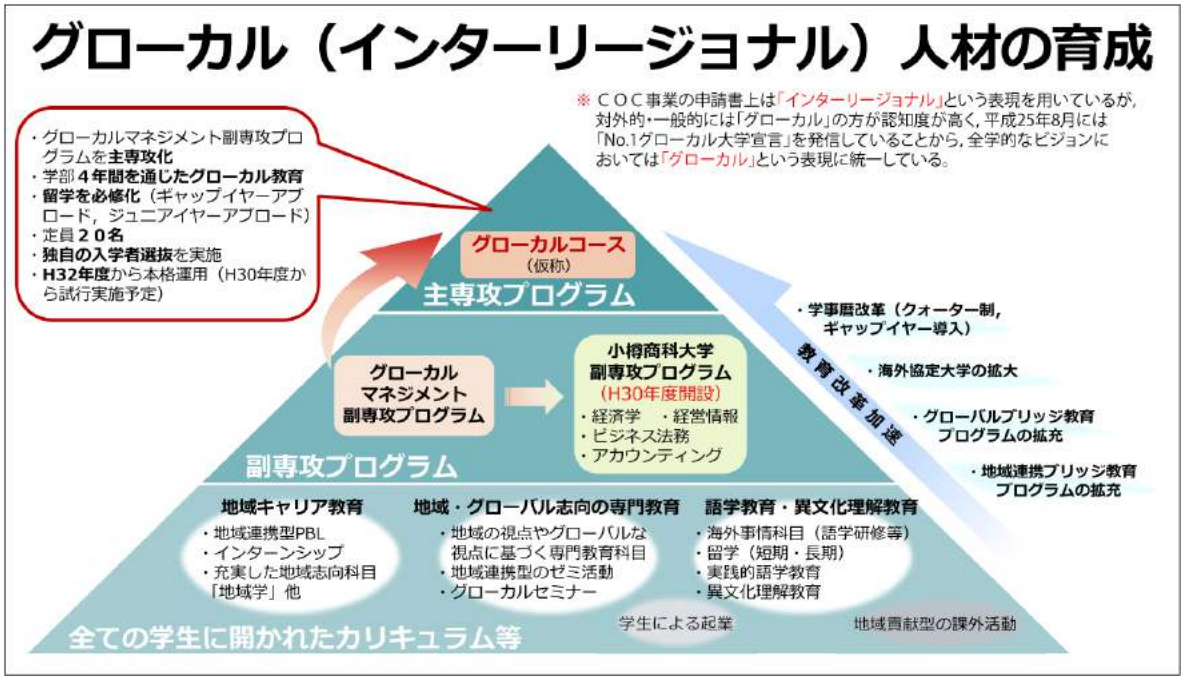
（図１）地域志向科目の推移



また，申請書における「インターリージョナルな人材の育成」に関する達成目標は，「平成29年度に新たな履修モデルを本格始動する」であったが，平成27年10月にグローカルマネジメント副専攻プログラムを始動しており，所期の目標について，予定を前倒しして達成している。

予定よりも早く目標を達成したことにより，平成29年度計画として「今後の発展・拡充に向けて検討を進める」を新たに設定したところであるが，グローカルマネジメント副専攻プログラムについては，主専攻化に向けて検討を開始しており，また，平成30年度からの４つの副専攻の新設を決定している。（図２）

（図２）主専攻化に向けた検討と新たな副専攻プログラムの設置



小樽商科大学には，経済・商学・企業法・社会情報という４つの学科があり，それらがいわば主専攻のコースであるが，経済学科の学生が簿記や会計学を学んだり，商学科の学生がデータサイエンスや商法を学んだりと，複数分野にまたがった知識を持つ学生を育成する副専攻を設置したことは，「幅広い知識を持って地域と地域，地域と人の『橋渡し』ができるような人材」の育成という事業趣旨に沿った取組といえる。

また，「検討を進める」という計画に対して，新たな副専攻の設置という具体的な成果まで踏み込んでおり，教育改革の手を緩めず加速させた大学の姿勢は高く評価できるものである。

【計画２】

地域連携コーディネーターを中心としたネットワーク形成及びコーディネート活動実施

地域連携コーディネーターを中心に，各地における各種委員会等の委員，ファシリテーター，コーディネーターとして参加し，地域間ネットワークの形成を図る。

地域連携コーディネーターは，泊村総合戦略策定委員会，余市町生涯活躍のまち委員会の委員として活躍しているほか，地域セミナー等の各種イベントの開催に協力しており，連携地域の活性化に貢献している。

学生教育においては，地域志向科目の中核である「地域学」のコーディネートに加え，公募プロジェクトを通じて様々な教育活動を実践している。特に「地域学」は，全 15 回のオムニバス形式で実施する科目であるが，経済界や自治体など幅広い分野からの講師招聘が実現しているのは，地域連携コーディネーターのコーディネート活動の賜物といえる。

地域人材教育においては，「ニセコビジネススクール」を実施するなど，地域人材の育成に積極的に取り組んでおり，受講者が実際に起業した例もあるなど，地域活性化に結びついている。

また，ＣＯＣ＋校である室蘭工業大学と連携して「ものづくり目利き塾」を開講するなど，大学間のネットワーク形成にも寄与している。

なお，地域間ネットワークの形成に関しては，【計画３】にも関連するが，地域連携コーディネーターのみならず，ＣＯＣ事業の補助金で雇用された研究員や事務補佐員を含め，全学的に取り組んでいるといえる。

【計画３】

教員及び学術研究員による地域研究及び社会実験の実施

教員及び研究員を中心に，事業の連携地域を中心とした地域研究及び社会実験を実施する。

新たな学内公募である「グローカルプロジェクト推進公募」を実施し，教員及び研究員をプロジェクト代表者とした 11 本のプロジェクトを採択しており，引き続き地域研究及び社会実験を推進している。

研究員については，北前船を中心とした多数の講演活動や，日本遺産の認定に向けた活動のほか，公募プロジェクト等を通して積極的に地域研究を進めており，地域になくてはならない人材として活躍している。

また，事務補佐員については，しりべし地域全 20 市町村をつなぐ地域周遊促進イベントを実施するなど，地域研究及び社会実験に取り組んでおり，補助金で雇用された教職員のそれぞれの活動が地域活性化につながっている。

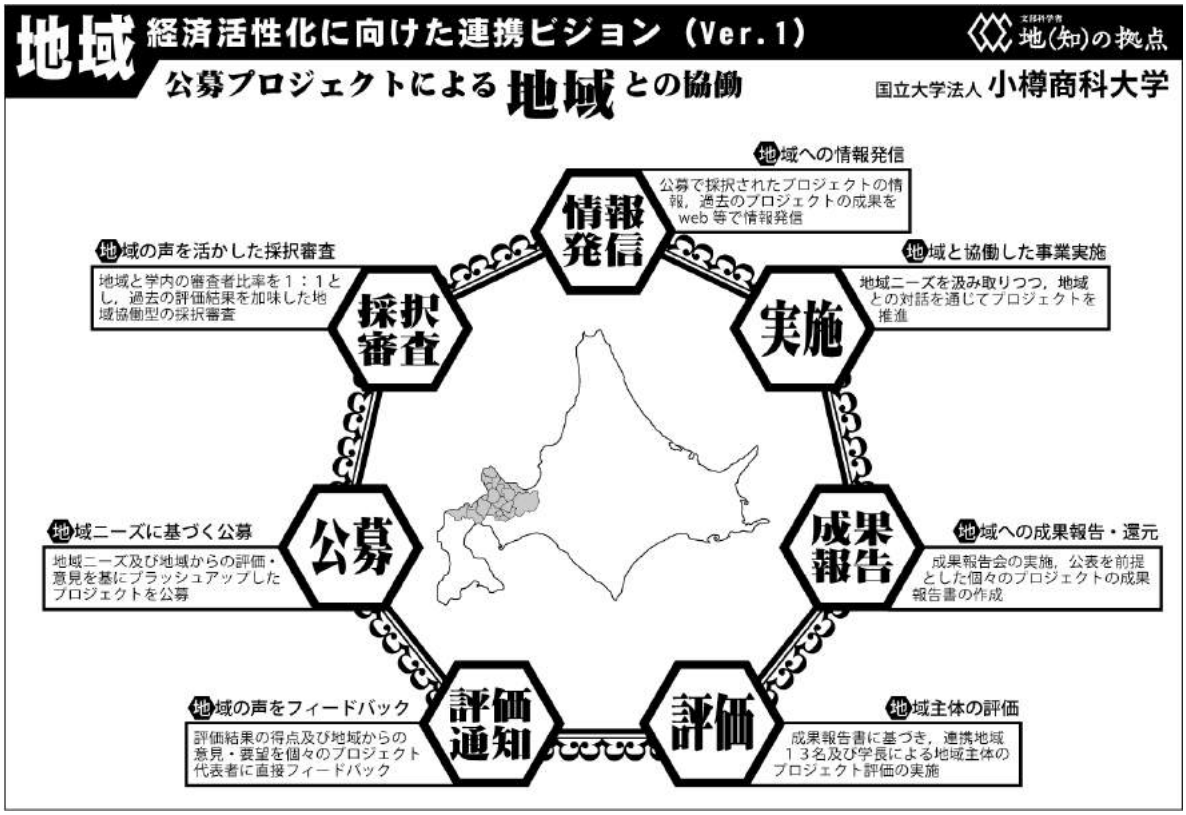
【計画４】

「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づくプロジェクト評価の実施

地域との協働で教育・研究活動を推進する「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づき，平成 28 年度に実施した地域志向型教育研究プロジェクトについて，学外者を中心とした評価を実施する。

小樽商科大学のＣＯＣ事業には，市民参加型の「外部評価委員会」と，連携機関で構成する「地域連携会議」の２つの外部評価機関が存在するが，「地域経済活性化に向けた連携ビジョン（Ver.1）」は，平成 27 年度に地域連携会議が策定したものである。平成 29 年度についても，同ビジョンに基づいた公募プロジェクトの評価及び採択審査が適切に実施されている。

（図３）地域経済活性化に向けた連携ビジョン（Ver.1）



なお，同ビジョンは，これまで不可侵領域に近かった大学の教育・研究プロジェクトに関して，初めて学外者による評価と採択審査を実施したものであり，ＣＯＣ事業の大きな成果の一つといえるものである。

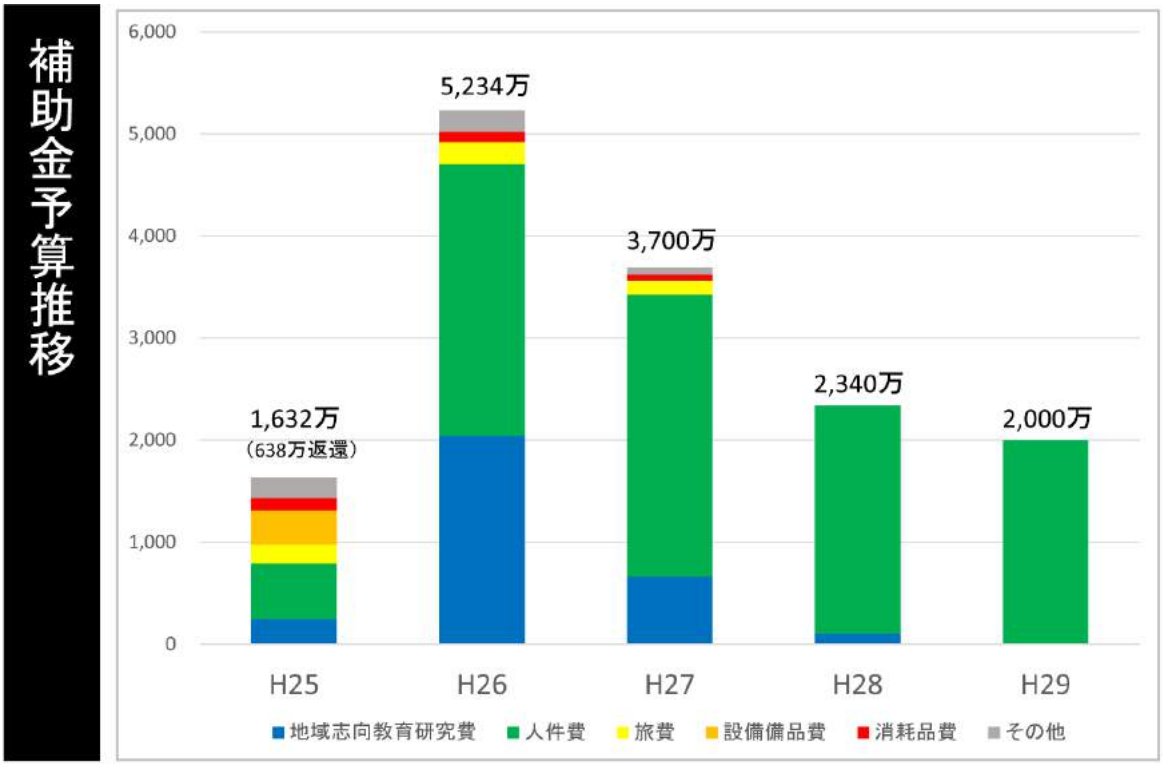
【計画５】

補助事業の成果に基づく新たなプロジェクト公募の検討・実施

本事業の大きな柱である「公募プロジェクト」について，補助金の趣旨を踏まえつつも，補助金を原資としない新たな学内公募の仕組みを構築し，引き続き地域課題の解決に取り組む。

公募プロジェクトによる地域課題の解決は，本事業における大きな柱であるが，【計画５】の評価に当たっては，補助金額の推移と併せて論じる必要がある。本事業の採択は平成 25 年度であるが，実質的な事業初年度となる平成 26 年度以降，補助金は右肩下がりに減少している（図４）。今年度に関しては，プロジェクト公募の原資であった地域志向教育研究費は０円となり，補助金では人件費すら賄えない状況となっている。

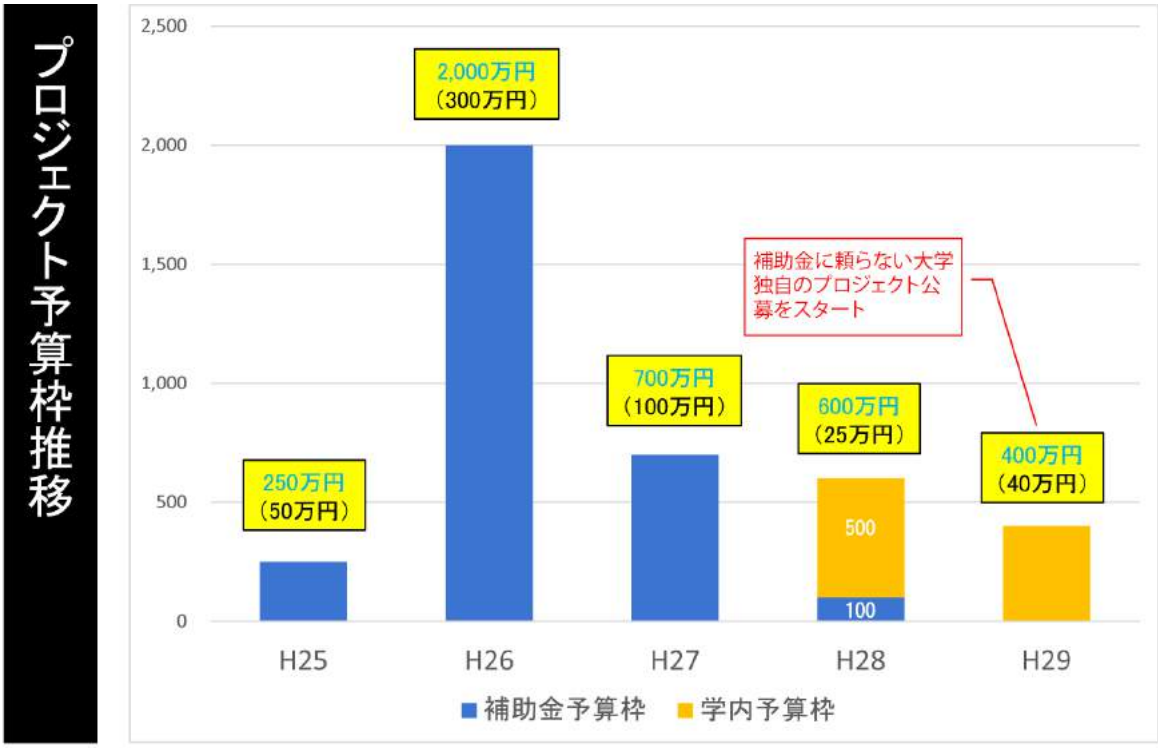
（図４）小樽商科大学ＣＯＣ事業における予算推移



こうした状況下において，本事業では，最小の費用で最大の効果を上げるという補助金の趣旨に沿い，毎年プロジェクトの公募要領を見直し，限られた予算の中で優れたプロジェクトを採択することにより，地域課題の解決に取り組んできた。

また，次ページの（図５）からも分かるように，平成 28 年度からは学内予算を投入してプロジェクト公募を実施しており，平成 29 年度には，補助金の公募の仕組みを活かした新しい公募である「グローカルプロジェクト推進公募」に移行している。補助事業期間内に今後の自立自走に向けた取組を完了している点は評価できるものである。

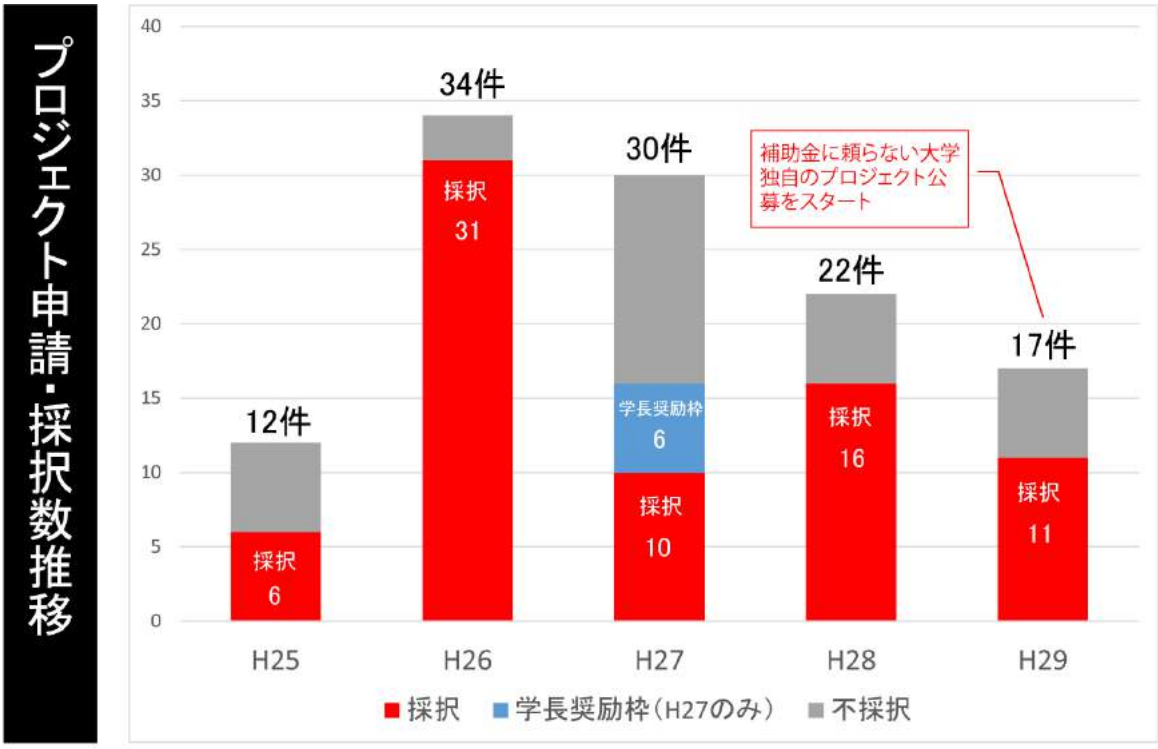
（図５）公募プロジェクトの予算推移



250万円
（50万円）

上段：総予算枠
下段：プロジェクト1件当たりの予算上限

（図６）公募プロジェクトの申請・採択数推移



なお，平成 29 年度の総予算枠は，ピークであった平成 26 年度から１／５に大幅減少しており，それに伴い，申請数は１／２，採択数は１／３にそれぞれ減少しているが（図６），外部評価の仕組みを取り入れたことにより，教職員の意識が変わり，質の良いプロジェクトだけが残っているという意味では，決してネガティブな側面ばかりではない。

【計画６】

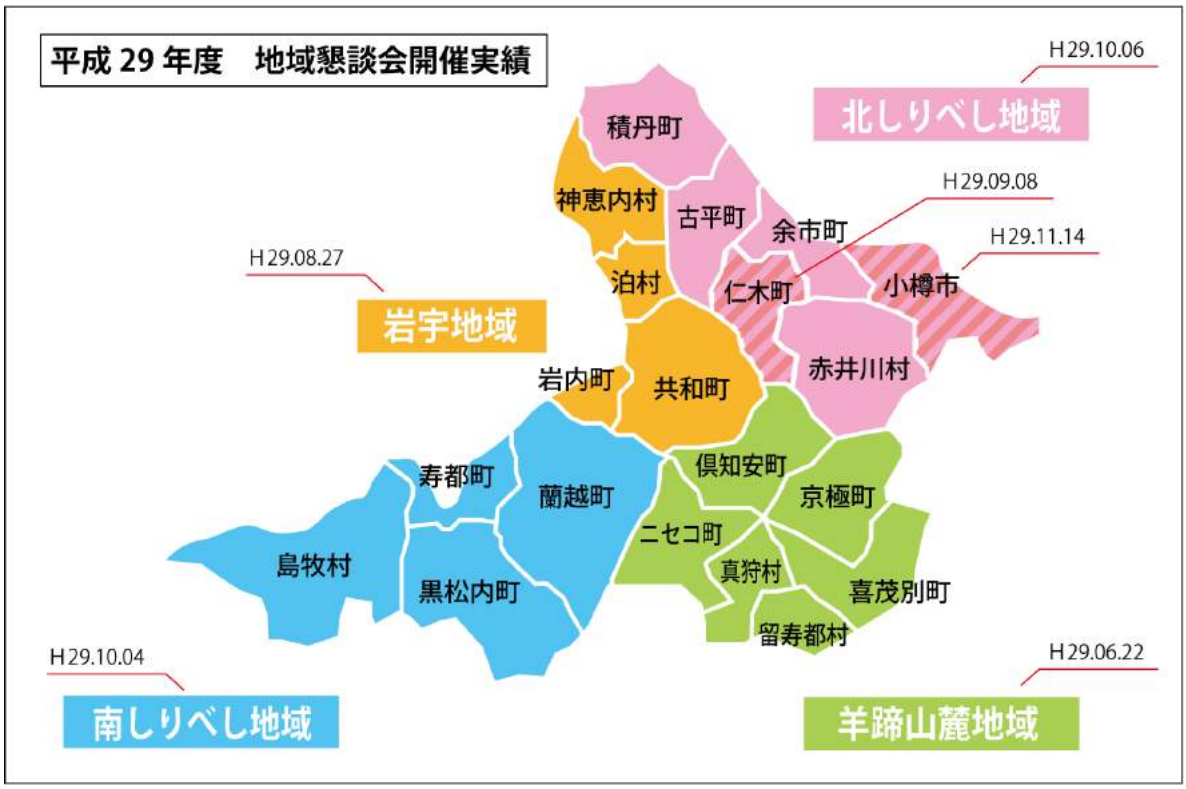
各地域における「地域懇談会」の開催

札幌市及びしりべしの各地域において「地域懇談会」を年５回開催し，住民目線でのニーズの洗い出しを行う。

「地域連携会議」を連携地域の関係者により＜行政目線＞で行う熟議の場とすれば，「地域懇談会」は大学が地域に出向き，＜住民目線＞で行う懇談の場である。平成 29 年度は，小樽市，仁木町，北しりべし地域，南しりべし地域，岩宇地域及び羊蹄山麓地域において計６回を開催しており，当初計画の５回を上回っている。

特に平成 29 年度の特徴として，これまでのように市町村単位での実施だけではなく，しりべし地域を４つのブロックに分け，しりべし地域全 20 市町村の住民が参加する形式で懇談会を実施したことが挙げられる。ＣＯＣ事業の推進を通して地域間ネットワークの形成が進んだ証拠であり，高く評価できるものである。（図７）

（図７）地域懇談会開催実績



【計画７】

観光人材育成プログラムの開講

観光業界を中心として，地元のリーダーとなり得る人材への学習機会を提供する「しりべし未来創造大学」等の開講により，地域人材の育成を図る。

申請書上の予定では，観光人材育成プログラムの本格稼働は平成 28 年度を予定していたが，平成 26 年度から前倒しで「しりべし未来創造大学」を開講している。平成 29 年度は４期目となるが，カリキュラム内容がブラッシュアップされており，大学の知見が地域に適正に還元されている。

地域での起業をサポートする「ニセコビジネススクール」についても，平成 26 年度の「ニセコ創業塾」から数えて４期目の開講となるが，実際に起業につながる事例が生まれており，地域雇用の創出につながっている。

また，室蘭工業大学との連携により，「ものづくり目利き塾」を新規開講し，ＣＯＣ＋事業における地域人材育成に取り組んだ点も評価できるものである。

【計画８】

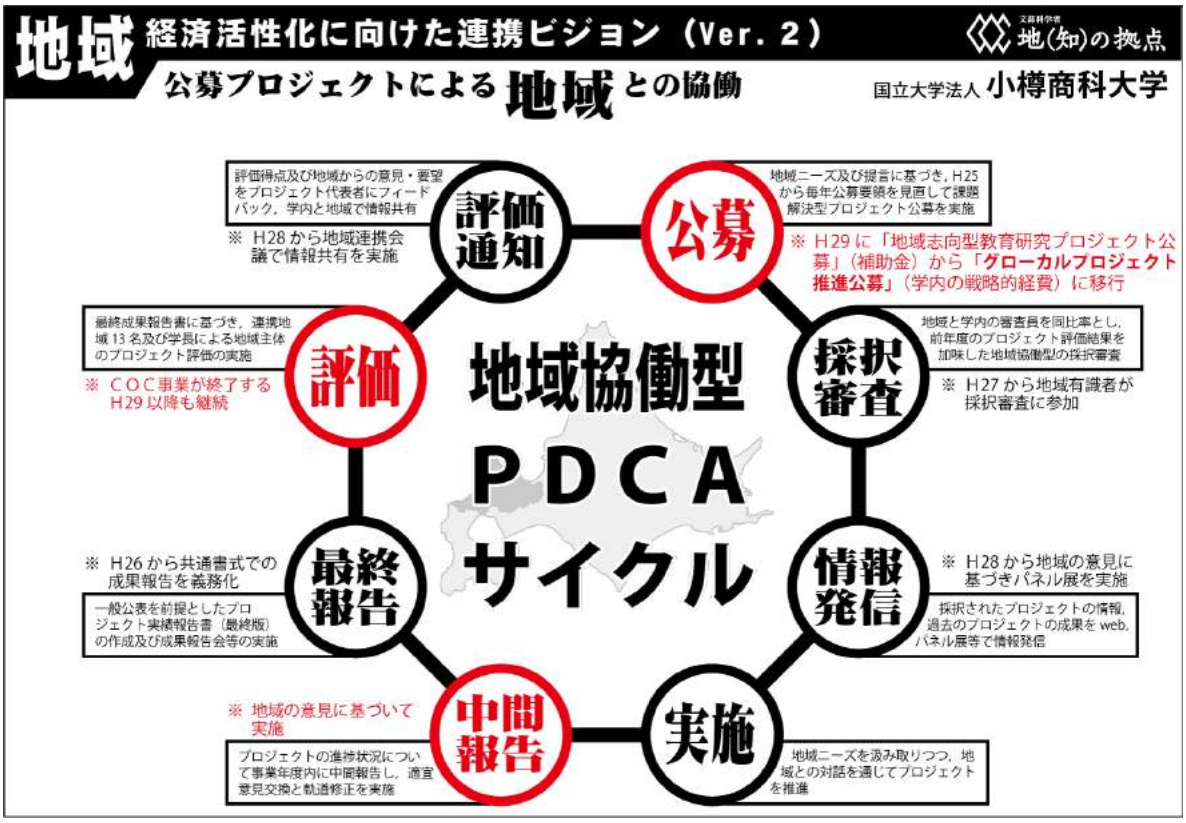
「地域連携会議」の開催及び「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.2)」の策定

連携する自治体等で組織する「地域連携会議」において，平成 27 年度に策定した「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づき，事業の点検・評価を実施するとともに，補助金期間終了後の事業を視野に入れた「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.2)」の策定に取り組む。

【計画４】に関連するが，今年度の地域連携会議において「地域経済活性化に向けた連携ビジョン（Ver.1）」の更新版である（Ver.2）を策定したところである。主な変更点は次ページ（図８）の朱書き部分に示したとおりだが，＜公募＞と＜中間報告＞に外部評価委員の提言を採り入れ，見直しを図っている点は評価できる。（P11-P12【外部評価委員からの提言（２），（４）】

特に＜評価＞に関しては，「ＣＯＣ事業終了後においても，引き続き全機関で評価を実施するべき」との意見が，地域側から寄せられたとのことである。プロジェクト評価は年度初めの４～５月に実施するもので，負担感のある作業であるが，こうした声が地域から挙がったという事実は，大学と地域の関係性を物語るものである。平成 29 年度のプロジェクトについては，外部評価委員会としても地域連携会議と同様に，責任を持って評価を行うこととしたい。

（図８）地域経済活性化に向けた連携ビジョン（Ver.2）



【計画９】

平成 28 年度事業報告書の作成

平成 28 年度の取組を取りまとめた事業報告書を作成する。

平成 28 年度の事業報告書を作成・公表済みであり，過去の外部評価委員の提言を参考とし，多額の印刷製本費をかける方式ではなく，web サイトを活用するとともに，必要に応じて自前印刷する方法により，経費を削減している点は評価できる。

なお，Ｐ12【外部評価委員からの提言（５）】のとおり，各種報告書作成の早期化について，今年度の意見交換において提言したところである。この点については，【計画 13】で後述するが，早期化に積極的に取り組んでいるといえる。

【計画 10】

市民参加型の外部評価の実施と外部評価委員会の開催

地域の有識者，市民等を構成委員とする外部評価委員会により，事業の進捗・達成状況等について外部評価を実施する。

本事業においては，年間を通じて外部評価委員との意見交換及び情報共有が行われており，自己点検評価及び外部評価がリアルタイムで進行している。この方式は独自性が高く，適切な外部評価が実現しているといえる。

なお，平成 29 年度の外部評価委員会（平成 30 年３月９日開催）において，外部評価委員の提言に対する大学の対応状況について，次のとおり報告されたところである。これらの対応事例の一つ一つは，革新的な取組事例として評価すべきものではないかも知れないが，外部評価委員から寄せられた意見に対して，速やかに対応するという大学の取組姿勢そのものは，評価に値するものである。

【外部評価委員からの提言及びその対応状況について】

	外部評価委員からの提言等	平成 29 年度の取組
1	今後は補助金がなくなっても地域貢献活動を続けられるような体制づくりが必要である。また，事業最終年度にあたり，これまで大学が取り組んできたことを，どのようにして地域に落とし込んで続けていくかということを考えなければならない。	NPO 法人 Egao では，活動資金の捻出のためにクラウドファンディングを実施しており，キャラクタープロジェクトでは，地域の協力・支援によって補助金を使わないイベント実施を実現した。 また，ＣＯＣ事業によるこれまでの教育研究の取組事例は，平成 30 年度に書籍化してその成果を地域に還元する予定である。
2	公募プロジェクトの予算は，補助金の逓減により年々縮小している。ＣＯＣ事業の最終年度に当たっては，今後の自立自走を見据えた上で，プロジェクト公募のあり方について今一度見直す必要があるだろう。	平成 29 年度の公募プロジェクトは，補助金を使った「地域志向型教育研究プロジェクト公募」から，全額学内予算による「グローカルプロジェクト推進公募」の新設により，補助金に頼らない大学独自のプロジェクト公募に移行している。
3	プロジェクトの実績報告書をパネル化して，パネル展示により情報発信を行っている点は評価できる。パネル展示は，小樽駅に限らず，実施する場所・機会を拡げてほしい。	平成 30 年 2 月 20 日に開催したシンポジウム（マリンホール）において，学生やプロジェクト代表者が地域貢献の活動事例について説明・報告を行うポスターセッションを実施した。 また，研究員が作成した北前船のパネルは，外部からの貸し出し要望により展示機会が増加している。

4	公募プロジェクトについては，外部評価委員が採択審査と評価に関わっているが，開始時と終了時以外の情報が乏しい。年度途中のプロジェクト進行状況について把握できる仕組みがあればなお良い。	平成 28 年度は，プロジェクト代表者に任意で「中間報告書」の提出を依頼したところだが，平成 29 年度は中間報告書の提出を義務化し，公募要領に明記した。
5	もう一つの外部評価組織である地域連携会議との調整もあるのだろうが，各種報告書が完成するまでに，事業年度が終了してから約半年かかる点は，改善した方がよい。	事業の外部評価機関が「外部評価委員会」と「地域連携会議」の２つあることから，例年９月頃に外部評価報告書を作成していたが，事業最終年度の平成 29 年度については，事業年度内の作成を目標に準備を進めている。
6	非常勤事務職員が取り組んでいる「地域貢献活動報道事例集」は，作成時にはそれほど必要ないと思っていても，後になって必要になる資料性の高いものである。作成にあたり非常勤事務職員が必要ならば，事業終了後も人件費を確保できないか，上層部に要望するのも手である。	ＣＯＣ補助金で雇用された非常勤事務職員については，雇用延長申請により事業期間終了後の雇用が決定しており，引き続き地域貢献に関する業務に従事することとなった。また同様に，補助金で雇用された准教授及び研究員についても学長のリーダーシップにより継続雇用を決定するなど，補助金事業終了後の体制維持に取り組んでいる。
7	小樽商科大学のＣＯＣ事業においては，研究員や事務職員がいわゆる「鞄持ち」として教員や役職者について回るのではなく，それぞれが異なるテーマや活動領域を持ち，大学の一員として主体的・能動的に行動している点が評価できる。個々が役割を果たすことによって事業全体が機能する体制を継続・強化してほしい。	研究員については，北前船をテーマとした講演を多数実施しているほか，積極的かつ多角的な地域研究の推進により，事業年度を重ねるごとに，地域にとって欠かせない存在となっている。また，平成 29 年度も引き続き事務職員が「地域懇談会」や地域活性化イベントを主催しており，他のＣＯＣ大学には見られない事例といえる。
8	キャラクタープロジェクトではスタンプラリーを実施しており，小樽商工会議所の「知産志食スタンプラリー」と情報共有及び結果の比較を行っているが，こうした情報共有やネットワークづくりについては，今後も進めていくことが望まれる。	小樽商工会議所との連携を皮切りに，しりべし地域で開催されている１５のスタンプラリーの主催者と，機関の垣根を越えた意見交換及び情報共有に取り組んだ。成果物である調査報告書「しりべしケース１５」は，北海道に提言書として提出している。
9	学生の取組は比較的新聞に取り上げられやすいが，それ以外の大学のイベントや取組は取り上げられることが少ない。報道機関への情報発信については，プレスリリースだけではなく新聞社に足繁く通うことや，積極的に記者に働きかけることが重要である。	シンポジウムやフォーラムといった大学の取組については，開催告知のみの新聞報道に留まることが多く，イベント本体の記事が掲載されることは少ないため，平成 30 年 2 月 20 日のシンポジウムについては，委員の提言を受けて新聞社への働きかけを積極的に実施した結果，記事の掲載につながっている。

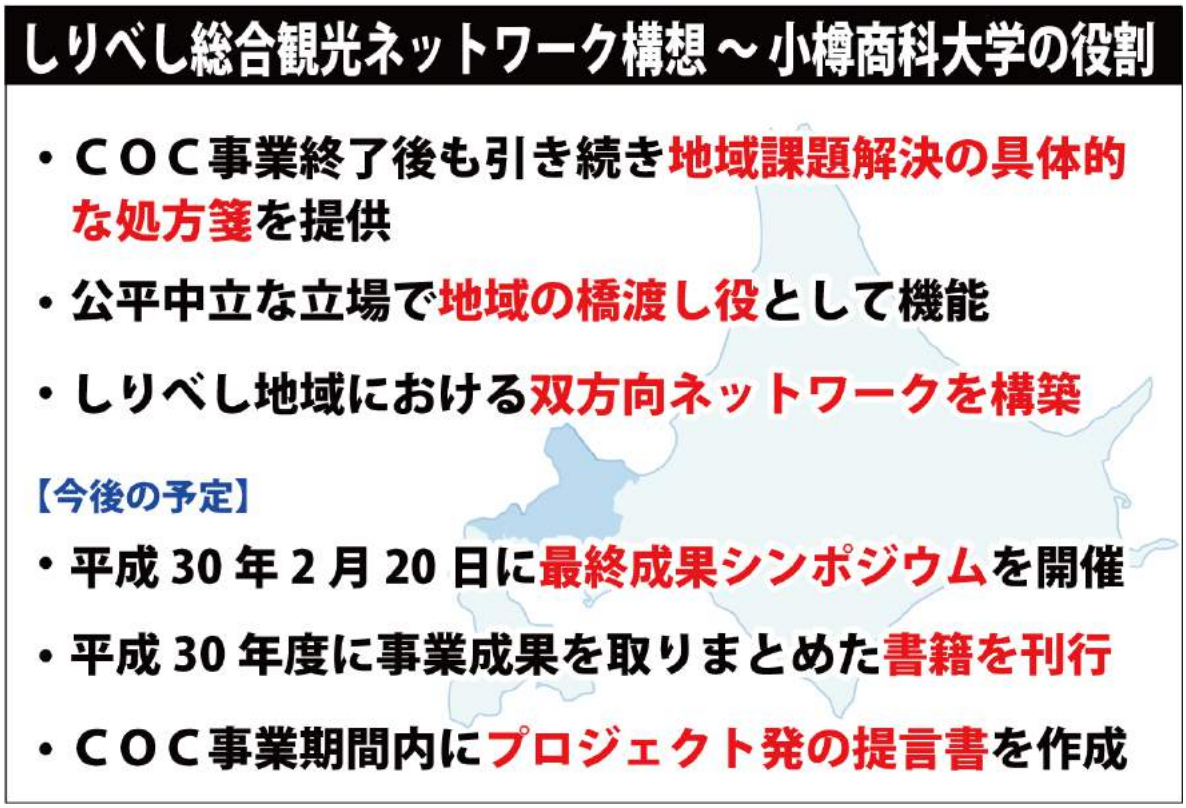
【計画 11】

しりべし総合観光ネットワーク構想の提言

事業期間を通じて実施してきた「しりべし地域」における観光振興を中心とした取組をベースに，地域と大学の連携による地域振興のあり方について，地域連携会議を通じて提言する。

本事業における主たる目的の一つは，小樽商科大学が所在する「しりべし地域」において，観光を軸とした地域活性化策に取り組むことであるが，事業最終年度の大きな目標である「しりべし総合観光ネットワーク構想」については，今年度の地域連携会議において提言されており，概要は（図９）のとおりである。

（図９）しりべし総合観光ネットワーク構想（地域連携会議より）



本計画の取組内容について補足すると，計画中の「事業期間を通じて実施してきた「しりべし地域」における観光振興を中心とした取組をベースに」という点については，地域連携会議において「観光をテーマとした『しりべし地域』活性化の 100 事例」（図 10）として，成果物の展示（図 11）とともに，これまでの取組が報告されている。

（図 10）観光をテーマとした「しりべし地域」活性化の 100 事例（地域連携会議より）

観光をテーマとした「しりべし地域」活性化の100事例

No	取組・事業名	区分	対象地域	年度
1	ニセコ地区における中長期滞在型観光客のモビリティに関する研究　―モビリティサービスの基本構想―	公募プロジェクト	倶知安町，ニセコ町	H25-H26
2	小樽・後志地域全体地域における北前船の歴史的価値の観光資源化	公募プロジェクト	しりべし地域全体	H25-H29
3	小樽市民と商大生が支える地域メディアの定着へ向けて	公募プロジェクト	小樽市	H25-H27
4	ニセコ観光局プロジェクト協議会（倶知安町、ニセコ町）との連携による、長期滞在型観光に関する調査・研究	公募プロジェクト	倶知安町，ニセコ町	H26-H28
5	歴史的建造物保存・活用のためのファンド形成のための研究	公募プロジェクト	小樽市	H26-H29
6	食を通じた後志地域全体の観光戦略プラン策定	公募プロジェクト	しりべし地域全体	H26
7	余市町における観光を主軸とした地域経済活性化に関する調査・研究	公募プロジェクト	余市町	H26-H28
8	キャラクターでつなげる地域の輪プロジェクト	公募プロジェクト	しりべし地域全体	H26-H28
9	観光資源開発としての小樽市立病院・医療ツーリズム事業の実現可能性調査	公募プロジェクト	小樽市	H26-H28
10	小樽観光業に関する実態調査	公募プロジェクト	小樽市	H26
11	小樽を中心とした後志地域全体地域におけるヒューマンストーリーを活用した新たな観光資源の開発	公募プロジェクト	小樽市，余市町	H26
12	北海道指定有形文化財　小樽市鰊御殿パンフレット英語化プロジェクト	公募プロジェクト	小樽市	H26
13	小樽港クルーズ客船外国人乗船客用観光マップ作成プロジェクト	公募プロジェクト	小樽市	H26
14	ニセコ観光圏（倶知安町、ニセコ町）における、国際観光マーケティングプロジェクト	公募プロジェクト	倶知安町，ニセコ町	H26
15	地域と学生をつなげる新たな小樽ガイドブック「たるぽーと」の製作	公募プロジェクト	小樽市	H26-H29
16	天狗山と山手エリアのグローバル観光推進への取組	公募プロジェクト	小樽市	H27
17	ICTを活用した観光案内サービスの提案-観光案内所のIT化によるサービス向上を目指して-	公募プロジェクト	小樽市	H27
18	積丹町における教育・研修旅行の体験型メニュー（夏季・厳冬期・海外向け）５０種類の開発	公募プロジェクト	積丹町	H27
19	外国語表示の拡大等を通した、おたる水族館の利便性向上のための取組み	公募プロジェクト	小樽市	H27-H28
20	中国語・韓国語による小樽観光案内作成プロジェクト	公募プロジェクト	小樽市	H27
21	Google Map APIを利用したおたるウォーキングマップ･アプリの開発に向けて	公募プロジェクト	小樽市	H28
22	旧国鉄手宮線で巡る外国人観光客のための小樽散策マップ作成プロジェクト	公募プロジェクト	小樽市	H28
23	小樽・後志地域全体におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化	公募プロジェクト	小樽市	H28-H29
24	外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト	公募プロジェクト	小樽市	H29
25	地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性	公募プロジェクト	しりべし地域全体	H29
26	後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究	公募プロジェクト	しりべし地域全体	H29
27	Lost in Translation? 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サーヴィス」の課題とその克服 ― 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」（日本語・英語）作成を含めた解決策提案も視野に入れて	公募プロジェクト	倶知安町，ニセコ町	H29
28	あんかけ焼そばを味わう宿泊プランを発売	学生活動	小樽市	H25
29	「小樽あんかけ焼そば事典」を作成	学生活動	小樽市	H25,H29
30	余市観光協会のシャッターアートを制作	学生活動	余市町	H26
31	デジタルサイネージの動画作成や観光サイトにて小樽の魅力発信	学生活動	小樽市	H27
32	小樽とマカオの魅力を伝える「映像交流イベント」を開催	学生活動	小樽市	H27
33	内閣府主催「地方創生☆制作アイディアコンテスト」にて優秀賞受賞	学生活動	岩内町	H28
34	小樽の地域活性化を目指すNPO法人EgaO設立	学生活動	小樽市	H28
35	特定非営利活動法人Digital北海道研究会主催「サッポロ・オープンデータGIS大賞2016」にて入賞	学生活動	小樽市	H28
36	ロボット「ペッパー」を使った観光サービスの実験を小樽で実施	学生活動	小樽市	H28
37	おたる水族館でイルカとコラボカフェをオープン	学生活動	小樽市	H28
38	余市産ブドウを原料としたワインの可能性と地域産品の魅力をデザインと物語を通じて発信する産学連携によるプロジェクト	学生活動	余市町	H29
39	花園商店街の交流拠点整備	マジプロ	小樽市	H25
40	ソーシャルメディアの活用	マジプロ	小樽市	H26
41	コンテンツツーリズムの推進	マジプロ	小樽市，余市町	H26
42	小樽堺町通りの認知度向上	マジプロ	小樽市	H26
43	しりべしの魅力発見・発信	マジプロ	しりべし地域全体	H27
44	地域交流拠点のリノベーション	マジプロ	余市町	H27
45	6秒で伝える！小樽の魅力	マジプロ	小樽市	H27
46	小樽観光客の満足度向上	マジプロ	小樽市	H28
47	「しりべし塾」での地域の魅力発見・発信	マジプロ	仁木町，古平町，赤井川村	H28
48	小樽観光地のユニバーサルデザイン	マジプロ	小樽市	H28
49	銭函エリア盛り上げます!!	マジプロ	小樽市	H29
50	小樽ときめきチャンネル	マジプロ	小樽市	H29

No	取組・事業名	区分	対象地域	年度
51	「おたるくらし」Facebook，webサイト	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H25-
52	小樽PR動画「ガオチャンネル」	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H28-
53	小樽鰊御殿英語版パンフレット	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H26
54	小樽港クルーズ乗船客用観光マップ	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H26
55	余市・小樽における竹鶴政孝とリタ	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H26
56	小樽れっけん	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H26-H29
57	ガイドブック「たるぽーと」	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H26-H29
58	北前船と小樽・後志	実績・成果物（プロジェクト）	しりべし地域全体	H27
59	小樽天狗山パンフレット	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H27
60	小樽水族館パンフレット	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H27
61	小樽観光案内マップ（中国語）（韓国語）	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H27
62	ご当地キャラクターキャンディ，トレカ，クリアファイル等	実績・成果物（プロジェクト）	しりべし地域全体	H27-H29
63	旧手宮線英語版パンフレット	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H28
64	おたる水族館チラシ（英語）（繁体字）（簡体字）（簡体字）	実績・成果物（プロジェクト）	小樽市	H28
65	堺町通り商店街のPR動画	実績・成果物（マジプロ）	小樽市	H26
66	リタのレシピを基にプディングケーキを再現	実績・成果物（マジプロ）	小樽市，余市町	H26
67	NTTタウンページ後志地方版に特集記事	実績・成果物（マジプロ）	しりべし地域全体	H27
68	外国人観光客向けのトイレ使用説明シール（4カ国語）	実績・成果物（マジプロ）	小樽市	H28
69	ご当地キャラクターシールリレー	イベント（プロジェクト）	しりべし地域全体	H27-H29
70	石原裕次郎記念館閉館に伴うプロモーション(潮ねりこみ，運河さんぽ，閉館セレモニー，記念トレカ)	イベント（プロジェクト）	小樽市，余市町，仁木町，古平町	H29
71	小樽市花園銀座商店街案内所「花銀コンシェルジェ」	イベント（マジプロ）	小樽市	H25
72	特別講義余市編「良い知だヨ！全員集合」	イベント（マジプロ）	小樽市，余市町	H26
73	イベント「宇宙物語in未知の駅」	イベント（マジプロ）	余市町	H27
74	イベント「宇宙ナイトin余市」	イベント（マジプロ）	余市町	H27
75	スタンプラリー「ぜに☆すた」	イベント（マジプロ）	小樽市	H29
76	冬季観光体験メニュー開発委託事業	共同研究・受託研究	積丹町	H27-H28
77	ニセコ町産農産物ブランド化戦略研究	共同研究・受託研究	ニセコ町	H28
78	本学教員6名が地方創生関連委員会の座長，副座長に就任	委員派遣	小樽市，余市町，積丹町，泊村，岩内町，蘭越町，ニセコ町	H26-
79	しりべし未来創造大学	地域人材育成	しりべし地域全体	H26-H29
80	ニセコ創業塾2014	地域人材育成	ニセコ町	H26
81	ニセコビジネススクール	地域人材育成	ニセコ町	H27-H29
82	「北運河と北前船－歴史的価値の観光資源化を目指して－」	公開講座	小樽市	H26
83	岩内講座「歴史文化を活かした地域振興とまちづくり」	公開講座	岩内町	H28
84	連続公開講座「北海道から，考える」	公開講座	北海道全体	H29
85	「竹鶴政孝とリタ-ウイスキーにかけた人生-」	パネル展	小樽市，余市町	H26
86	「余市・小樽における竹鶴政孝とリタ」	パネル展	小樽市，余市町	H26
87	「食の都　小樽へようこそ」	パネル展	小樽市	H27
88	「小樽観光のフロンティア，北運河・手宮へ行こう！」	パネル展	小樽市	H27
89	「キャラクターでつなげる地域の輪プロジェクト」	パネル展	しりべし地域全体	H27
90	「小樽ゆかりの文学作家と小さな鉄道の旅をしよう！」	パネル展	小樽市	H27
91	「小樽れっけん～小樽の歴史的建造物ものがたり～」	パネル展	小樽市	H28
92	マジプロ成果発表会（中間・最終）	シンポジウム・セミナー	しりべし地域全体	H25-H29
93	CBCセミナー「後志の広域観光をデザインする！」	シンポジウム・セミナー	しりべし地域全体	H25
94	COCシンポジウム「『マッサン』後の広域観光を考える」	シンポジウム・セミナー	余市町	H26
95	平成26年度「地（知）の拠点整備事業」成果報告会	シンポジウム・セミナー	小樽市，余市町，倶知安町，ニセコ町	H26
96	「竹鶴政孝とリタ-ウイスキーにかけた人生-」	シンポジウム・セミナー	小樽市，余市町	H26
97	地（知）の拠点整備事業公開シンポジウム「観光行動を読む-心理学で考える観光まちづくり」	シンポジウム・セミナー	小樽市	H26
98	地方創生シンポジウム「広域観光のススメ　小樽から後志へ」	シンポジウム・セミナー	しりべし地域全体	H27
99	地域文化と観光資源化シンポジウム	シンポジウム・セミナー	余市町	H28
100	北前船と小樽・後志～歴史的価値と観光資源化を考える～	シンポジウム・セミナー	しりべし地域全体	H28

※本学以外の機関が主催したイベントにおける講演，パネリスト等の派遣実績は，取組事例に含めておりません。

（図 11）「100 事例」の成果物展示風景（地域連携会議より）

また，（図９）で【今後の予定】と書かれた内容に関して，「ＣＯＣ事業期間内にプロジェクト発の提言書を作成」については，平成 30 年２月に北海道後志総合振興局に提言書を提出しており（図 12），振興局長からも高い評価を受けている。（P12【外部評価委員からの提言（８）】に関連）

（図 12）北海道への提言書を後志総合振興局長に手交

「事業成果を取りまとめた書籍を刊行」については，補助金の減額に伴い，予算がない状況下においても，補助金事業の説明責任を果たし，地域に事業成果を還元するため，学内予算により書籍化に取り組むとのことである。

事業期間を通して積み重ねた「100 事例」のような土台があり，事業期間内に北海道への提言をしっかりと行い，事業終了後も地域への成果還元に取り組むという事業の連続性は，本事業が適切に実施されたことを物語るものである。

【計画 12】

最終成果報告シンポジウムの開催

事業最終年度にあたり，COC 事業の取りまとめとなる成果報告会を開催する。

平成 30 年２月 20 日にＣＯＣシンポジウム「商大は地域の大学になったか　～次の 100 年も北海道とともに～」を開催しており，定員を上回る約 170 名の参加があった。

また，Ｐ11【外部評価委員からの提言（３）】に基づき，成果物をパネル化し，ポスターセッションを同時開催しているが，学生から地域に向けて活動報告を行う展示と併せて，地域から学生に向けて地元企業の魅力を伝える展示を行うなど(図 13)，大学からの一方通行ではなく，地域と大学が双方向に交流を行う形式で実施している。

（図 13）学生の活動報告（左）と地元企業紹介（右）が同時に行われたポスターセッション

なお，（図 14）は今年度日本経済新聞社が実施した「地域貢献度ランキング」の道内国公立大学のランキング推移であるが，本学は事業開始当初の 110 位から 25 位と順位を大きく上げている。

（図 14）道内国立大学ランキング推移（大学の地域貢献度ランキング 2017 より抜粋）

	2014	2015※	2017	前回との順位比較	
北海道大学	68	49	23	↑	26
小樽商科大学	110	78	25	↑	53
北見工業大学	48	38	62	↓	▲ 24
帯広畜産大学	137	161	91	↑	70
室蘭工業大学	62	44	113	↓	▲ 69
北海道教育大学	105	87	189	↓	▲ 102
旭川医科大学	150	155	194	↓	▲ 39

※ 2016は当該ランキングにかかる調査なし

シンポジウムのタイトルである「商大は地域の大学になったか」を正しく証明することは難しいが，地域貢献度ランキングの順位が，道内他大学と比較しても順調に上昇している点は，小樽商科大学がＣＯＣ事業の推進を通して，地域のための大学として成長した客観的な資料といえる。

また，今年度の当該ランキングは，各種実績値の単純カウントで得点が計算される設問が多く，学生数の多い総合大学に有利に働く傾向があったが，小規模大学の中で最も健闘している事例といえ（図 15），地域に貢献する大学としての価値は，順位以上のものがあると考えられる。

（図 15）学部学生数からみる小樽商科大学のランキング状況

■ TOP30 校の中で最も小規模大学

Rank	大学名	大学種別	学部学生数（2016.5.1）
25	**小樽商科大学**	国立	2,301
15	名古屋市立大学	公立	3,851
20	横浜市立大学	公立	4,127
22	宇都宮大学	国立	4,160
11	岩手大学	国立	4,800

■ 順位が大きく上昇した大学の中で，唯一の小規模大学

2017	2015	順位変動		大学名	大学種別	学部学生数（2016.5.1）
24	126	102	↑	日本大学	私立	67,909
25	78	53	↑	**小樽商科大学**	国立	2,301
25	69	44	↑	早稲田大学	私立	42,181
19	48	29	↑	関西大学	私立	28,568
11	39	28	↑	新潟大学	国立	10,318

【計画 13】

平成 29 年度事業報告書等の作成に着手

補助金事業終了に伴い，学内・学外の運営体制の変化が想定されることから，最終年度の事業報告書の作成について，事業年度内に準備を進める。

例年９月頃に作成していた外部評価報告書及び地域貢献活動報道事例集については，事業期間内の３月末に完成する見込みであるが，特に外部評価報告書の早期化は画期的である。年間を通じて外部評価委員との意見交換及び情報共有が行われることにより，外部評価委員の提言に対して大学が迅速に対応する，リアルタイム方式の外部評価が実施された成果であろう。

なお，計画には「学内・学外の運営体制の変化が想定される」との一文があるが，ＣＯＣ補助金で雇用された准教授，研究員及び事務補佐員については，学長のリーダーシップにより継続雇用を決定しているとのことである。Ｐ12【外部評価委員からの提言（６）】にも関連するが，補助金事業終了後の体制維持に取り組んでいる点は，評価できるものである。

総　評

平成 29 年度の小樽商科大学のＣＯＣ事業は，申請書や調書に記載した計画，また，前年度の外部評価結果等を踏まえながら，事業の目標達成に向けて積極的に取り組み，適切に事業を推進しているものであり，事業の所期の目的を達成したと評価ができる。

ＣＯＣ事業の外部評価委員は，一人も入れ替わることがなく，事業の採択から終了まで事業の推移を見届けてきた。全外部評価委員は一致して，国の政策転換や，補助金の突然の減額など，数々の不確定かつマイナス要素に翻弄されながらも，地（知）の拠点大学としての責務を果たすべく，創意工夫により事業に取り組んできた小樽商科大学の姿勢を高く評価するものである。

個別プロジェクトでいえば，大学のマスコットキャラクターを活用して，しりべし地域全 20 市町村と連携して取り組んだ「ご当地キャラクターシールリレー」が，小樽商科大学のＣＯＣ事業らしい一例である。プロジェクトの助走部分は補助金を活用しているが，事業の進行とともに地域の支援による実施に切り替え，最終的に補助期間終了後の連携ビジョンを北海道に提言している。補助金はあくまで助走経費であり，補助金のあるなしに関わらず，地域との関係を継続し，地域貢献に取り組むという姿勢は，小樽商科大学の地域連携ビジョンを映すものといえる。

一方，地域と世界の両方の視点を併せ持つ学生を育成する，という小樽商科大学のＣＯＣ事業の趣旨には賛同するが，学生の地域就職率を向上させるというＣＯＣ＋事業の方針については，残念ながら手放しで賛成し得るものではない。

地域の代表として組織された外部評価委員会であるが，地域の要望としては，むしろ若いうちにこそ外に出て様々な経験を積み，いつの日か地域に貢献する人材として戻ってきていただきたいという気持ちがある。そして，そうした人材が将来地域に戻って働きたいと思うような，魅力のある地元企業を作りあげることが，地域の役目だと考えている。

小樽商科大学のＣＯＣ事業の名称は，「地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成」であるが，まさに地域の声を聴き，地域とともに北海道の活性化に取り組んだものであった。地域が学生に，そして大学に何を求めているかを，今後もしっかり受け止めていただき，引き続き地域のための大学として輝き続けることを期待したい。

以　上

平成29年度　小樽商科大学COC事業 自己点検評価及び外部評価結果

各取組計画の達成状況について，下記の基準によりⅠ～Ⅳの4段階で評価したものである。

Ⅳ：計画を上回って実施している
Ⅲ：計画を十分に実施している
Ⅱ：計画の実施が不十分である
Ⅰ：計画を実施していない

NO	平成29年度の取組計画	自己評価	外部評価結果 ※個別の評価者名は非公表			
1	**インターリージョナルな人材を育成するための教育活動の実施** 1年次必修科目である科目群「知（地）の基礎」により地域に係る初年次教育を実施するとともに，Blended Learningによる実践的な語学教育を推進する。また，予定を前倒しして平成27年10月に設置したグローカルマネジメント副専攻プログラムについては，所属学生に実施したアンケート等を活用し，今後の発展・拡充に向けて検討を進める。	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
2	**地域連携コーディネーターを中心としたネットワーク形成及びコーディネート活動実施** 地域連携コーディネーターを中心に，各地における各種委員会等の委員，ファシリテーター，コーディネーターとして参加し，地域間ネットワークの形成を図る。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
3	**教員及び学術研究員による地域研究及び社会実験の実施** 教員及び研究員を中心に，事業の連携地域を中心とした地域研究及び社会実験を実施する。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ
4	**「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づくプロジェクト評価の実施** 地域との協働で教育・研究活動を推進する「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づき，平成28年度に実施した地域志向型教育研究プロジェクトについて，学外者を中心とした評価を実施する。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
5	**補助事業の成果に基づく新たなプロジェクト公募の検討・実施** 本事業の大きな柱である「公募プロジェクト」について，補助金の趣旨を踏まえつつも，補助金を原資としない新たな学内公募の仕組みを構築し，引き続き地域課題の解決に取り組む。	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ
6	**各地域における「地域懇談会」の開催** 札幌市及びしりべしの各地域において「地域懇談会」を年5回開催し，住民目線でのニーズの洗い出しを行う。	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
7	**観光人材育成プログラムの開講** 観光業界を中心として，地元のリーダーとなり得る人材への学習機会を提供する「しりべし未来創造大学」等の開講により，地域人材の育成を図る。	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ
8	**「地域連携会議」の開催及び「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.2)」の策定** 連携する自治体等で組織する「地域連携会議」において，平成27年度に策定した「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.1)」に基づき，事業の点検・評価を実施するとともに，補助金期間終了後の事業を視野に入れた「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.2)」の策定に取り組む。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
9	**平成28年度事業報告書の作成** 平成28年度の取組を取りまとめた事業報告書を作成する。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
10	**市民参加型の外部評価の実施と外部評価委員会の開催** 地域の有識者，市民等を構成委員とする外部評価委員会により，事業の進捗・達成状況等について外部評価を実施する。	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ
11	**しりべし総合観光ネットワーク構想の提言** 事業期間を通じて実施してきた「しりべし地域」における観光振興を中心とした取組をベースに，地域と大学の連携による地域振興のあり方について，地域連携会議を通じて提言する。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
12	**最終成果報告シンポジウムの開催** 事業最終年度にあたり，COC事業の取りまとめとなる成果報告会を開催する。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
13	**平成29年度事業報告書等の作成に着手** 補助金事業終了に伴い，学内・学外の運営体制の変化が想定されることから，最終年度の事業報告書の作成について，事業年度内に準備を進める。	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ

平成29年度　小樽商科大学ＣＯＣ事業

活動履歴

4月	5日	平成28年度実績報告書を室蘭工業大学へ提出
	10日	文部科学省　ＣＯＣ事業　学生アンケート実施(～11日)
	13日	外部評価委員への事業報告
	19日	第1回ＣＯＣ情報共有会議
	20日	マジプロ2017w中間発表会(小樽商科大学にて開催)
	21日	平成28年度実績報告書を室蘭工業大学へ提出
	25日	平成29年度　グローカルプロジェクト推進公募開始
5月	12日	平成28年度公募プロジェクトの実績をwebで公表
	17日	第2回ＣＯＣ情報共有会議
	27日	北前船北海道プロジェクト「北前船と銀行」【プロジェクト⑦】
	29日	第1回ＣＯＣ＋教育プログラム開発委員会
6月	9日	ＣＯＣ/ＣＯＣ+北海道合同会議
	13日	第3回ＣＯＣ情報共有会議
	14日	外部評価委員へのプロジェクト採択審査依頼
	22日	地域懇談会（羊蹄山麓地域）
	28日	第4期しりべし未来創造大学　開催（～11月16日　全11講）
	30日	平成29年度　グローカルプロジェクト推進公募：採択決定
7月	9日	マジプロ2017w最終成果発表会（オーンズ春香山ゆり園にて開催）
	21日	ご当地キャラクター「シールリレー2017」開催（～10月1日）
	31日	第4回ＣＯＣ情報共有会議
8月	9日	外部評価委員への事業報告
	9日	ものづくり目利き塾（学生向け）（～10日　室蘭工業大学にて開催）【プロジェクト④】
	19日	小樽シンポジウム「日本遺産」の認定に向けて【パネリスト：高野 宏康】【プロジェクト⑦】
	27日	地域懇談会（岩宇地域）
9月	1日	第5回ＣＯＣ情報共有会議
	2日	平成29年度 小樽商科大学 アクティブラーニングシンポジウム
	5日	Matching HUB Otaru 2017（グランドパーク小樽にて実施）
	8日	地域懇談会（仁木町）
	14日	第1回地域貢献推進委員会
	19日	ものづくり目利き塾（学生向け）（～20日　小樽商科大学にて開催）【プロジェクト④】
10月	3日	第6回ＣＯＣ情報共有会議
	4日	地域懇談会（南しりべし地域）
	6日	地域懇談会（北しりべし地域）
	7日	北海道経済学会2017年度シンポジウム地域遺産の観光資源化【パネルディスカッション司会：江頭 進，パネリスト：高野 宏康】【プロジェクト⑦】
	15日	マジプロ2017s中間発表会（小樽市銭函市民センターにて開催）
	16日	第2回ＣＯＣ＋教育プログラム開発委員会
	17日	ニセコビジネススクール2017　開催（～11月21日　全5講）
	24日	平成29年度真狩村文化財講座「真狩村歴史文化の再発見」（真狩村公民館にて実施）【講師：高野 宏康】
	30日	地域連携会議（「地域経済活性化に向けた連携ビジョン(Ver.2)」策定，「しりべし総合観光ネットワーク構想」を提言）
	31日	パネル展「北海道における北前船の歴史的価値と観光資源化」（～11月1日　Matching HUB 金沢2017会場にて実施）【プロジェクト⑦】
11月	4日	NIKI Wine Seminar ～仁木のワインがもたらす未来を語る～【パネリスト：プラート カロラス】
	6日	外部評価報告書作成会議
	7日	外部評価報告書作成会議
	8日	ものづくり目利き塾（社会人向け）（～9日　室蘭工業大学にて開催）
	10日	外部評価報告書作成会議

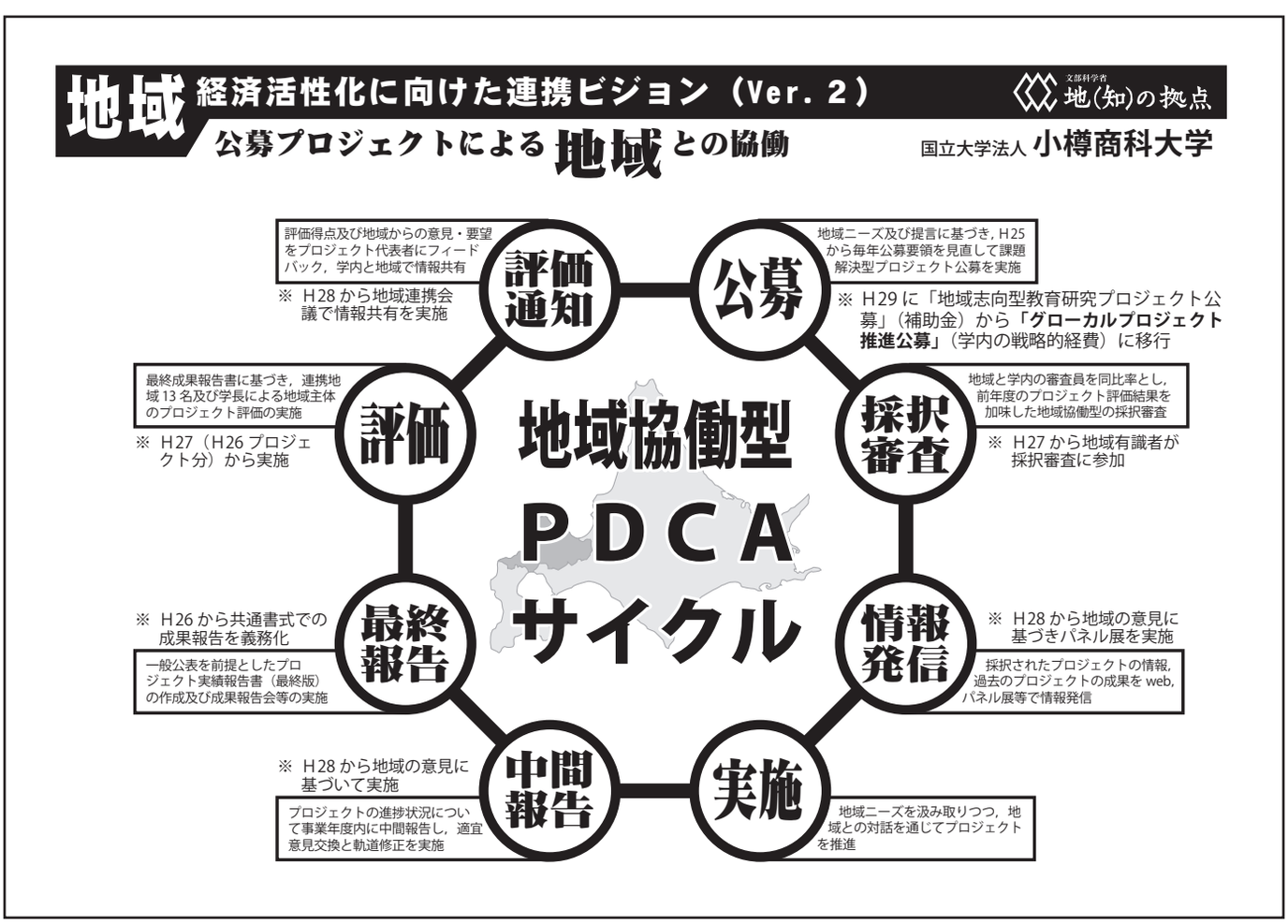
	14日	第7回ＣＯＣ情報共有会議
	14日	手宮界隈のみなさん&小樽商大生の座談会「小樽のひとに学ぶ～手宮の歴史文化とまちづくり～」【プロジェクト⑥】
	14日	地域懇談会（小樽市）
	22日	第1回ＣＯＣ推進本部会議
	28日	第2回ＣＯＣ推進本部会議
12月	4日	ニセコビジネススクール2017 2nd　開催（～5日　全4講）
	5日	ゆめぽーとライブ第23弾『「物語」で読み解く 小樽の歴史的建造物』（小樽商科大学付属図書館にて実施）【講演：高野 宏康】
	6日	第3回ＣＯＣ推進本部会議
	8日	地域連携会議構成員への事業中間報告
	12日	岩内講座「人口減少時代の地域経営」【講師：大津 晶】
	14日	インナーゼミナール大会（公募プロジェクト1件の成果報告）
	17日	北の四大学　ビジネスシーズの可能性
	17日	ご当地アプリを用いたアンケート調査【プロジェクト⑤】
	19日	第8回ＣＯＣ情報共有会議
1月	18日	第9回ＣＯＣ情報共有会議
	19日	サロン・ド・ホッカイドウ
	20日	マジプロ2017s最終成果発表会（小樽市観光物産プラザにて開催）
2月	7日	外部評価委員への事業報告
	8日	第10回ＣＯＣ情報共有会議
	9日	第3回ＣＯＣ＋教育プログラム開発委員会
	15日	パネル展「北海道における北前船の歴史的価値と観光資源化」（～4月2日　北陸銀行麻布支店にて実施）【プロジェクト⑦】
	20日	小樽商科大学ＣＯＣシンポジウム「商大は地域の大学になったか～次の100年も北海道とともに～」（公募プロジェクト2件の成果報告）
	20日	「しりべし総合観光ネットワーク構想」に基づく「しりべしケース15」を北海道に提言
	22日	東北学院大学来学（本学ＣＯＣ事業紹介）
3月	2日	高知大学　ＣＯＣ/ＣＯＣ＋全国シンポジウム参加（～3日）
	9日	ＣＯＣ外部評価委員会
	13日	外部評価報告書作成会議
	23日	第11回ＣＯＣ情報共有会議
	26日	外部評価報告書作成会議
3月		商大生が小樽のひとにインタビュー「小樽のひとに学ぶ」2017年度版完成【プロジェクト⑥】
		英語版リーフレット「OTARU SEAFOOD GUIDE」完成【プロジェクト③】
		日英中版「おたるれっけんファンド」リーフレット完成【プロジェクト①】
		英語版外国人患者のための医療マップ・冊子完成【プロジェクト⑨】

平成 29 年度

プロジェクト成果報告書

● このプロジェクト成果報告書は，パネル展示等による一般の方への公表を前提としているため，各プロジェクトとも「１枚」にとりまとめた簡略版となります。プロジェクトの詳細な報告書，プロジェクト代表者からのコメント等については，本学 web サイトでご確認いただけます。

● 本学のＣＯＣ事業では，地域活性化のためのプロジェクトに関して，「地域経済活性化に向けた連携ビジョン」に基づき，地域の方々に評価，採択審査に参画していただいております。本報告書は，評価の際の資料としても活用しているものです。



小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト
プロジェクト代表者：江頭　進

１．プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市に存在する歴史的建造物を保存・活用するためのクラウドファンディング（以下、CF）による資金調達システムをPRし、支援者層を形成するためのプロジェクトである。

小樽市内に存在する歴史的建造物は町の景観を構成し、また観光や教育の資源となっているという点で公共財的性格を持っている。その反面、それらの歴史的建造物は、個人所有のものが多く、莫大な維持管理費用はすべて所有者個人が負担しており、それに耐えきれず取り壊される建築物も少なくない。本プロジェクトは小樽市民の公共財である歴史的建造物の保存・活用の費用を広く市民に負担してもらうためのCFのPRを行うためのパンフレットを作成するものである。

他方で、歴史的建造物を保存・活用するためには莫大な費用が必要であり、小樽市民とその関係者だけでは十分な資金を用意できない。そこで小樽を訪れる国内外からの観光客に対して、本CFの意義を説明し、小樽ファンを形成し、固定的な寄付者層の形成をめざすものである。

２．具体的な取組内容

パンフレットは、日本語6000部、英語1000部、中国語3000部を作成し、関係者への配布を開始した。

今後小樽の観光案内所等に置かれ、また観光時期に合わせて、駅や観光スポットで配布する予定である。また東京小樽会や関西小樽会へも送付し協力を依頼する予定である。

またクラウドファンディングサイトに関しては、信販会社との契約が成立した。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

クラウドファンディング本体は、様々なトラブルを乗り越えて、現在第一号案件の小樽公園通り教会の修復工事の準備を行っている。現在、2階までは上がれるが3階以上が閉鎖されているものを修復し、利用を可能とする予定である。(報告書作成時点では、教会側の会議で提案された詳細な計画を審議中である)。Webサイトは、http://ega-o.org/cf/

地域活性におけるふるさと納税の検討
プロジェクト代表者：二村　雅子

１．プロジェクトの目的・概要

目的

最近，「ふるさと納税」という言葉がニュースや新聞で賑わっている。その理由の１つとして，寄附を受ける自治体が返礼品を渡す仕組みが納税者に受けていると考えられる。「ふるさと納税」の仕組みの是非も重要であるが，少なくとも農作物や海産物が豊富である北海道地域で恩恵を受けた地域は存在している。

北海道の地域活性化について，「ふるさと納税」を１つの素材として，学生自身が，問題について，自ら論理立てて考えることをできるようになることを目指す。

概要

以下3点について取り組んだ。

１．従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。
２．ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。
３．学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

（東川町は，政策的に優れた仕組みで成功している自治体として「ふるさと未来大賞」を受賞しており，調査対象として適切であると考えた。）

２．具体的な取組内容

１．従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。

地方自治体の税収の仕組みについて，北海道財務局の方から参考文献を提示頂き，輪読を行った。ふるさと納税について，HPなどを参照して理解を深めた。

２．ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。

ふるさと納税が地域経済活性化に役立つという大きな仮説の中で，どのようなことが要因になるのか，逆に問題点としてどのようなことが考えられるかを検討し，その上で質問項目を作成した。質問項目を作成した後，北海道財務局の方からアドバイスを受けた。

３．学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

2017年10月18日から19日に東川町を訪問した。19日の9時30分から長原淳副町長と面談をした後，12時過ぎまで，担当者の方へ質問を行った（企画総務課課長菊池伸氏，企画総務課写真文化首都創生室主事柳澤奨一郎氏，企画総務課地域おこし協力隊和田北斗氏）。

学部3年生という早い段階から，地域経済に関して検討をすること，現地へ行くための予定をたてること，実際に現地へ行き社会人の方へインタビューをすることで，学生の問題意識および動機づけを高めることができた。訪問後，「ふるさと納税が地域経済活性化に役立つ」という大きな仮説のもと調査にいったが，東川町は人口増加地域であるということも考慮すると，「町政が元々良いという素地のなかで，ふるさと納税は経済活性化の面で良いという要因の１つではないか」と仮説の再考を行い，東川町へ再度質問票を作成するなど学生達は能動的に行動できている。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

これまでの成果を報告するため，小樽商科大学ゼミナール協議会によって毎年主催されている「インナーゼミナール大会」（2017年12月14日）に参加し，「東川町の町づくり」という題目で参加し，第2位となった。報告することで，学生達は内容の理解を深めた。また，やり通したことで自信を深めた。

東川町を題材としているが，小樽市のふるさと納税や市政運営について考えるヒントになる可能性がある。

外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト
プロジェクト代表者：井上　典子

１．プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市の依頼により、本学学生の学習活動の一環として、小樽の美味しいお魚と魚料理、魚をテーマとしたイベントなどを外国人観光客にわかりやすく紹介する英語版リーフレットを作成するものである。

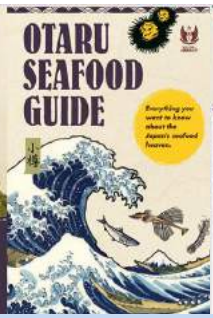
プロジェクトの目的として、①学生が小樽市の水産や観光担当職員、民間の関連事業者などと連携し、小樽市の古くからの主要産業である水産業への知識と理解を深めながら英語運用能力の向上を図ること。②小樽は海鮮料理が有名だが、これまで小樽のお魚にスポットを当てた外国人向けのリーフレットは作成された例がなく、食と産業の面から小樽観光の魅力について増加を続ける外国人観光客に発信することで消費効果を高めること。③学生は自分たちが作成したリーフレットが外国人観光客に使われ、小樽の観光振興に寄与することで大きな達成感を得ることができ、今後の学習意欲向上や就職活動にも良い影響を与えること、が挙げられる。

２．具体的な取組内容

2017年5月1日：小樽市役所を訪問し、中野産業港湾部長から正式に本プロジェクトの依頼を受けるとともに、協力者と必要性、事業内容について打ち合わせを行った。
6月：本プロジェクトに関心を持つ学生を募り、プロジェクトチームを編成し、リーダー・サブリーダーを決定するとともにプロジェクトの概要を周知した。
7月：小樽市水産課が事務局を務める小樽のおさかな普及推進委員会の日本語チラシやホームページなどを参考にして大まかな構成を決定した。
8月～9月：必要な現地調査を繰り返し行う。小樽運河および駅周辺にて外国人観光客に対しアンケート調査を行った。
10月：調査内容などを整理し、協力者の監修を受けながらリーフレットに載せる内容とレイアウトの決定、日本語版の作成を開始した。同時に、小樽の魚を紹介する動画および観光客のマナーに関する英語の動画撮影を行った。
10月末：協力者なども参加して中間発表。日本語版に対するフィードバックを頂く。
12月～：日本語版を完成させ、英語への翻訳作業を開始。校正作業を行い、英語最終版を完成させた。平行して、動画の編集作業を行った。
2月13日：　完成品を印刷し、小樽市政記者クラブで発表を行った。完成品を市内外の観光案内所に置いてもらうとともに市外観光キャンペーンや物産展で活用してもらう予定。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

小樽市では、全国的にもここだけという寿司屋通りがあることでも分かるように寿司など新鮮な海の幸を活かした料理や加工品が国内外からの観光客などに高い評価を得ている。しかしながら既存の観光ガイドなどは施設や景観が重視されており、海の幸について特化して紹介するツールは存在していなかった。そこで、小樽の魚にスポットを当て、小樽名産の海産物とその旬の時期のほか、料理や水産加工品、市場などについてさまざまな角度から紹介することで、より小樽観光を楽しむことができるような英語版リーフレットを作成したことで、外国人観光客の滞在時間と消費を高めることにより、経済効果を高めることが期待される。また、このリーフレットを市外での観光キャンペーンなどに使用することで、リピーターの来樽意欲の向上が期待される。学生においては、実際に小樽観光の最前線で求められている観光案内ツールを自らの手で創意工夫しながら作成したことで、単に学習効果だけではなく、職業訓練の意味でも大きな成果が期待される。さらにプロジェクト参加による社会人との交流、英語運用能力の向上などについても学生生活において得難い経験のチャンスを付与する機会となったと考える。



地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」
プロジェクト代表者：李　濟民

１．プロジェクトの目的・概要

近年のビジネスの現場では文系・理系の括りでは解消できない様々な課題が山積しています。「ものづくり目利き塾」は、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業として、小樽商科大学と室蘭工業大学が共催し、8月と9月の計4日間にわたって、文理の学生が垣根を超えて共に学び、将来、北海道経済・世界経済で活躍する「理系の現場・技術を知る文系人材」「文系の知見・考え方で発想できる理系人材」の育成を目指す取り組みです。

２．具体的な取組内容

室蘭と小樽合計4日間で開催し、両大学あわせて18名の学生が参加し、学習を行いました。
8月に開催された前半の2日間では、小樽商大生が室蘭工業大学ものづくり基盤センターを訪問、清水ゼミの学生らとともに、材料強度や鋳造といったものづくりの基礎と実習体験、企業見学（日本製鋼所　室蘭製作所）を行いました。
9月の後半2日間では、室蘭工大生が小樽商科大学を訪問、市原ゼミの学生とともに、ものづくり企業の企業評価、グループワークによる事例研究、企業見学（北海製罐、光合金製作所）を行いました。

【開催地：室蘭】

第1回	【1日目】8月9日（水）		【2日目】8月10日（木）	
午前	9:30～9:45	開講式	9:00～11:30	実習（鋳造（鉄））
	9:45～10:00	安全講習		
	10:00～10:30	講義（ものづくりの歴史）		
	10:40～12:40	講義（材料強度） 実習ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｷﾝｸﾞ　製作	11:30～12:00	まとめ
休憩	12:40～13:40	昼休憩	12:00～13:00	昼休憩
午後	13:40～14:40	講義（材料強度） 実習ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｷﾝｸﾞ　実験	13:00～16:00	工場見学 日本製鋼所室蘭製鉄所
	15:00～17:00	実習（鋳造（鋳））		

【開催地：小樽】

第2回	【1日目】9月19日（火）		【2日目】9月20日（水）	
午前	9:30～12:00	「ﾃﾞｨｽｸﾛｰｼﾞｬｰと企業評価」 講義（決算書の読み方・財務分析の基礎） ｹｰｽｽﾀﾃﾞｨ 適切な情報開示の必要性・重要性について理解）	9:00～13:30	事例研究（ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｷﾝｸﾞ） 技術分析と財務諸表分析 企業価値の評価 ﾃﾞｨｽｸﾛｰｼﾞｬｰ度の検証評価
休憩	12:00～13:00	昼休憩		
午後	13:00～16:30	工場見学 ①北海製罐　②光合金製作所	13:30～15:00	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ・質疑応答
			15:00～15:30	閉講式

清水教授の講義

日本製鋼所見学

鋳造実習

完成品

北海道新聞による、小樽商科大学講義の報道

理系学生にビジネス感覚を
小樽商大で塾 室工大生 決算書読む

市原准教授の講義

光合金製作所見学

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

両大学生への受講アンケートでも、講義で取り上げたテーマに対する興味・関心が高まったとの意見が多く、連携による学習効果は高かったと考えます。この取り組みの効果を検証するには複数年で実施する必要があると考えています。
市原ゼミのWeb-Siteで情報発信をしていますのでご覧ください！
http://cac-tus.wixsite.com/cactus

地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性
プロジェクト代表者：原口　和也

１．プロジェクトの目的・概要

情報の発信には様々な媒体が用いられるが、その1つとしてパズルアプリを用いることができないか、実証を通じて検討する。すなわち、情報の種類によっては、パズルで遊ぶことを通じて効果的に伝達できないかを問うのである。このプロジェクトでは題材として小樽および周辺地域の地名やスポット名にフォーカスし、地域のキーワードを散りばめた「ご当地スケルトンパズル」で遊べるアプリを開発し、リリースする。得られたフィードバックを元に、例えばどのような情報を、どういったパズルで発信するのが効果的なのかなど、今後の展開に必要な知見を取りまとめる。

２．具体的な取組内容

上で述べたような小樽地域に関するご当地アプリの開発と、当該アプリを用いた情報発信の効果を測定するためのアンケート調査を実施した。

【アプリ開発】ご当地スケルトンパズルで遊ぶことのできるアプリ「オタルトンパズル」を開発した。スケルトンパズルとは、白黒に塗られた盤面とキーワードのリストが解答者に与えられ、すべてのキーワードをスロット（縦もしくは横に連なる白マスの極大区間）に割り当てることを問うパズルである。このアプリの最大の特徴は、小樽地域のキーワードを用いたスケルトンパズルで遊べることにある（全11問）。キーワードの由来に関する簡単な説明を見ることもでき、地域学習への活用も期待される。なおパズルインスタンスの生成には、これまでの研究を通じて開発してきた最適化プログラムを用いた。

さらにもう1つ、ゼミ指導を通じて、小樽に関するクイズアプリ「たるあるき」を学生に開発してもらった。このアプリには小樽に関する豆知識を問うクイズ10問と、現地（小樽市内）に行かなければ正解がわからないような画像を用いたクイズ10問が収められており、いずれも学生がフィールドワークを通じて考案した。

両アプリとも、Apple社のApp Store、もしくはGoogle社のGoogle Playから無償でダウンロード可能である。また風景画像の使用など、小樽観光協会の協力を得ている。

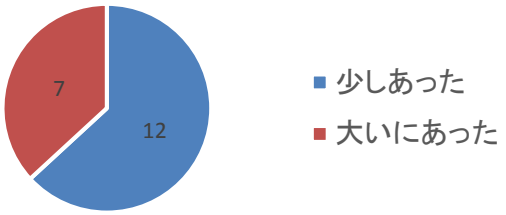
【アンケート調査】2017年12月17日（日）、「小樽のご当地アプリで遊んで景品をもらおう」という景品交換イベントを実施し、来場者に対してアンケートを依頼した。このイベントは、アプリ内のパズルやクイズを解いて得られるクーポンと、景品（小樽の土産物、玩具、飴など）を交換するというものである。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

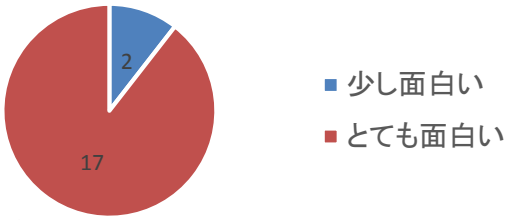
参加者25名のうち、19名からアンケートの回答が得られた。結果の一部を以下に示す。地域のことを学ぶ上で、上記のようなアプリを活用することに一定の効果があることが、左側の円グラフから読み取れる。さらに右側のグラフから、実施したイベントに対する高い評価が読み取れる。

スケルトンパズルのように単語を用いたパズルのアプリや、地域のことそのものを問うパズルアプリが、地域学習のツールとして有用であることを実証的に示すことができた。また、当初はアンケート調査を目的として行ったイベント自体が予想以上の盛り上がりを見せ、このようなイベントが地域振興の役割を果たしうることも示すことができた。

アプリで遊んでみて，小樽や周辺地域について何か学ぶことがありましたか？



このイベントのような，アプリを用いた地域振興イベントをどう思いますか？



※アンケートの問いに対する回答は5段階評価。上記グラフの赤が最高評価、青が次点。

小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化
プロジェクト代表者：小山田　健　プロジェクトリーダー：高野　宏康

１．プロジェクトの目的・概要

●プロジェクトの目的
　小樽・後志地域では、近代以降、多様な歴史文化が展開していますが、その担い手たちが高齢化などにより年々減少し、記憶の風化が進んでいます。本プロジェクトの目的は、小樽・後志地域の人たちのヒューマンストーリーを調査・記録し、地域資源としての活用を推進することです。

２．具体的な取組内容

●地域情報の学習および取材方法・記事のまとめ方の修得（採択後～平成29年7月）
授業（総合科目「グローバリズムと地域経済」）内で、小樽・後志地域の歴史文化および社会経済の特徴、取材方法、記事のまとめ方についての講義および、小樽市内バスツアー（5/27）によるフィールドワークにより、地域社会に対する理解を深め、取材と記事作成方法を習得しました。

●インタビュー実施と記事作成（平成29年6月～7月）
小樽のまちや歴史に詳しい市内在住の23人に学生が各3～4名のチームでインタビューを実施。約2千字の記事を作成しました。昨年度よりインタビュー先と密接にやり取りを行い、文字数を500字増加するなど記事作成方法の改善を行い、記事のクオリティを向上させました。

●ゲスト講師とのトーク＆ディスカッション
ゲスト講師（渡邉英彦氏・富士宮焼そば学会会長）を招聘し、食を通じた地域活性化についての講演および学生とのトーク＆ディスカッションを実施しました（5/31）。

●インタビュー先と学生の公開座談会（平成29年11月14日、会場：おたる千成）
手宮地区のインタビュー先等5名と学生による公開座談会を実施し、地元住民95名が参加しました（「小樽のひとに学ぶ～手宮の歴史文化とまちづくり～」）

●COCシンポジウムでの成果報告（平成30年2月20日、会場：小樽市民センター）
本プロジェクトに携わった学生2名がプロジェクトの内容と成果について報告しました。

●インタビューと座談会をまとめた冊子発行（平成30年3月、1000部）
インタビュー記事と公開座談会を収録した冊子を発行しました。小樽市内各所で配布し、市立小樽図書館等、小樽観光協会などに設置しました。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

　学生は授業での学習により地域への理解を深め、記事作成、座談会参加等により情報発信力を高めました。インタビュー集を発行、公開座談会開催により、小樽の人的資源について、市民・観光客へ情報発信し、着地型・交流型観光コンテンツなど地域資源としての活用を推進しました。

取材の様子（株式会社樽石にて）

手宮での公開座談会（11/14）

北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化
プロジェクト代表者：高野　宏康

1．プロジェクトの目的・概要

●プロジェクトの目的
北海道の発展に重要な役割を果たした北前船の調査研究を通じて、その歴史的価値の地域観光資源化を推進し、小樽・後志と道南、札幌圏をつなぐ新たな広域連携・観光ルート開発を目指します。
本年度は特に、①道内・択捉島、北陸の調査と、②日本遺産認定自治体との連携を推進しました。

2．具体的な取組内容

●調査研究（平成29年5月～平成30年3月）

①小樽倉庫の創設者・西谷家に関する新出資料を多数発見
旧西谷邸（石川県加賀市橋立町）の未調査資料を加賀市と連携して調査を実施しました。
（西谷海運の社史等を含む小樽および道内での西谷家の事業関連資料数千点以上）

②道内（後志・札幌・石狩・択捉島）、択捉島で北前船関連文化財の調査を実施
ヨイチ場所産のイナウ、九谷焼（小樽・後志・札幌・石狩）、船絵馬（厚田）、軟石（札幌・辻石材工業）、北洋漁業関連（函館、択捉島）等、新たな知見が得られました。

●情報発信・情報提供による地域観光資源化

①日本遺産事業に協力（北前船日本遺産登録推進協議会、日本遺産追加認定申請自治体：小樽市・石狩市・富山市・大阪市など、日本遺産認定自治体：函館市・加賀市・小松市など）。小樽市の追加認定申請に、本研究プロジェクトの調査研究成果、取組みが実績として位置づけられました。日本遺産認定記念講演会に協力・出演しました。

②HBC北前船こども調査団事業に協力　小樽でのワークショップ、ガイドツアー、全国の北前船寄港地（6自治体）が小樽に集まって開催した北前船こどもサミット、まっぷる特別編集「北前船こども調査団」に監修等で全面的に協力しました。

③北前船と北海道について各種メディアに論考を寄稿
（小樽商工会議所会報、BYWAY後志、小樽チャンネルMagazineなど）

④各種講演会、シンポジウム、ラジオ、新聞等による情報発信（20件）　花川北中学校では出前授業を実施し地域教育に貢献しました。COCシンポジウムで報告しました（2/20）。

北前船と銀行

日本遺産認定記念講演会

まっぷる特別編集版

上：西谷家調査（2018.11）
左：北國新聞の記事（2018.2.27）

3．プロジェクトの成果及び地域への還元

本年度は、日本遺産事業に協力することで、道内・北陸などの認定自治体と連携して北前船の観光資源化を推進することができました。また、北前船関連の全国学会、各地の地域振興事業などに情報提供を行い、小中学校、本学の地域志向型教育プログラムに成果を還元することで、調査研究・観光資源化・教育のサイクルを確立できました。

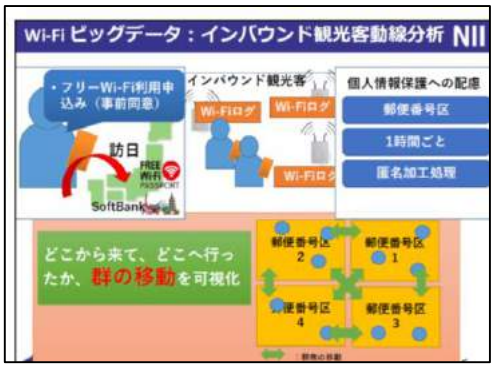
後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究
プロジェクト代表者：後藤　英之

1．プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、後志地域における観光客の動態を可視化し、新たな観光資源の発掘と観光戦略の検討を行うことを目的としています。具体的には、小樽市及び余市町、倶知安町、ニセコ町を対象とし、観光客の動態を把握、新たな観光資源の開発を行う。小樽市や余市町、ニセコ地域が連携し、観光地としてのブランドアップを図ることで、小樽・余市・ニセコ地域との広域観光圏形成が可能となり、地域経済活性化につながるものと考えております。

2．具体的な取組内容

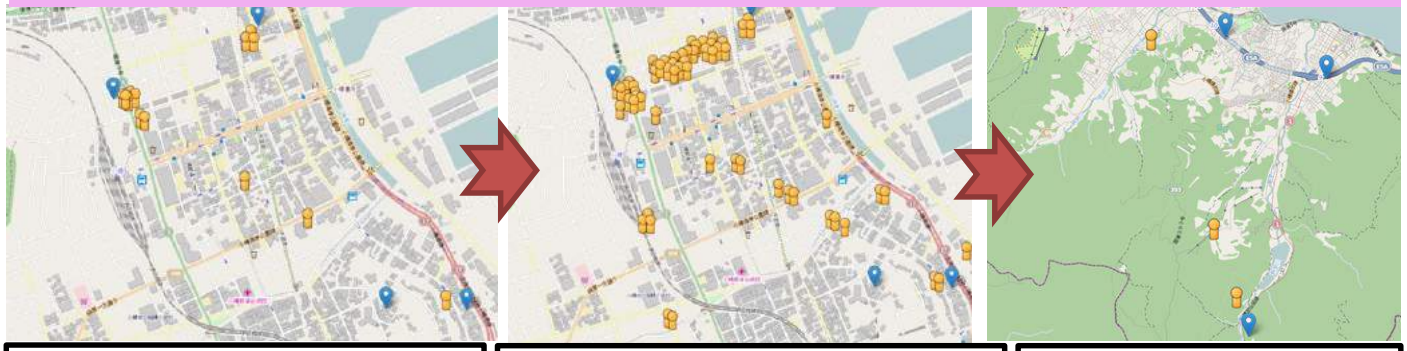
【本プロジェクトのスキーム】
本学と国立情報学研究所（NII）との共同プロジェクトとして立上げを行い、後志管内町村も参画しました。具体的には、NIIの開発した「wifiビックデータ動態分析プラットフォーム」を活用し、実験的に小樽市内のインバウンド観光客の観光動態分析を実施しました。今後、小樽での分析を後志地域での動態分析に拡大し、広域観光実現に向けたプロジェクト活動を行いたいと考えております。



ビックデータ動態分析プラットフォーム
「出所：NII曽根原研究室」

プロジェクト体制

小樽市における外国人観光客の動態（1日）



【午前中】
小樽駅⇔運河周辺への人流
小樽駅⇒メルヘン交差点への人流

【午後】
小樽駅⇔運河周辺への人流↑
小樽駅⇒メルヘン交差点への人流↑
小樽駅⇒朝里川温泉への人流

【午後～夕方】
小樽駅⇒朝里川温泉へ団体客の人流を確認
※朝里川温泉を核とした、観光造成の必要性

3．プロジェクトの成果及び地域への還元

今年度のプロジェクト成果は、連携機関との勉強会などを通じ地域政策に活用して頂く予定です。

Lost in Translation？ 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サーヴィス」の課題とその克服 ― 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」（日本語・英語）作成を含めた解決策提案も視野に入れて

プロジェクト代表者：佐々木　香織

１．プロジェクトの目的・概要

倶知安・ニセコ地域では外国人居住者と観光客が急増しており、その対応が喫緊の課題である。現下、教育や行政サーヴィスは適応し始めているが、医療サーヴィスは未知数だ。マイノリティを抱える地域における医療は、言語の差異ばかりでなく、身体・疾病観や医療制度といった文化・社会的差異にも起因し、いわゆる*lost in translation*が起こりがちである。その結果、診察や治療が滞ったり、患者が不必要な不安に陥ったりしやすい。その為、ロンドンなどの国際都市では、その対策を始めて久しい。本プロジェクトは、ゼミ生を中心とし、この問題にまつわる『地域の課題』を社会調査により追究し、その『解決策』の提案を行うことを目的とする。具体的には、外国人と日本人医師・看護師・薬剤師・薬剤販売従事者などとの間で*lost in translation*を防ぐような日本語と英語での「手引き」作成といった実践的解決策の提案も視野に入れる。倶知安・ニセコ地区の日本人関係者への聞き取り調査と同地域を訪れる外国人観光客へのアンケート調査を実施し、より現場の声を反映した解決策を模索する。本プロジェクトを通じ、①『地域貢献』が成され、更には、②参加学生が、a) 地域の課題と社会調査を習熟し、b) 地域の課題に協働して取り組み、c) 英語の活用もできるという、『グローカル人材』へ育っていくことが期待される。

２．具体的な取組内容

まず、関係者に対して現地で「聞き取り調査」を3回（9月,10月,1月）実施した。次に外国人観光客に対して「アンケート調査」(1月)を行い、情報収集と仮説の検証に役立てた。最後に調査結果をベースに、外国人へ必要な情報を提供すべく、冊子作成に取り組んだ。

第一回調査では、外国人が医療サーヴィスを受ける際に抱える問題点の洗い出しがなされた。特に重要な点としては①外国人がニセコ地域におけるドラッグストアも医療機関もよく把握できていない;②施設を知ったとしても、外国人に必要な情報（言語、支払い方法、開業時間）の入手が厳しい;③ニセコ地域の医薬関連施設の相互連携と情報不足により、外国人が施設をたらい回しにされている；という三点が挙げられる。

第二回調査では、外国人の情報不足とたらい回しの現状の原因を追究した。判明した要因は④日本の医薬品販売形態（薬剤師の配置など）と外国との差異による期待値のギャップ,⑤医療制度の違いに起因した、日本の医療サーヴィス選択（病院,各専門診療所,鍼灸など）への戸惑い,⑥日本の制度を当然視した情報提供と説明による、lost in translation;であった。

第三回調査は、実際に大量の外国人が訪れる中、ニセコ地域の外国人に対する医療サーヴィスの現状把握に努めた。すなわち、⑦各病院、調剤薬局、ドラッグストア等の施設における外国人への対応を聞き取り調査し、⑧外国人観光客の日本の医療サーヴィスに対する知識、体験、期待などアンケート調査をした。これらの調査により、外国人が必要とする情報を確認した。

1－3月は、調査結果をもとに市町村向けの調査報告書、ならびに外国人向けのニセコ地区の医療手引き・マップを作製した。「手引き・マップ」の表面ではlost in translation を引き起こす要因となる、我われが当然視してしまっている日本の医療サーヴィスについて、彼らとの違いを認識しながら、ピクトグラム（絵文字アイコン）や表を含め、説明するものとした。裏面は、地図で医療サーヴィス施設の位置関係を示しながら、具体的にその施設の利用にあたって外国人が必要としている情報（支払方法、薬剤師の有無など）を掲載した。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

本プロジェクトの成果は、大きく四つ挙げられる。一つは、参加学生が地域の課題に対して、調査と分析を行うスキルをつけたことである。第二に、全ての学生が外国人への対面アンケートを実施したことにより、英語の活用を含めた外国人との交流を行う技能を付け始めた点である。第三に、地域の課題に対して「解決策」として、英語による冊子・マップを作成し、各方面に納入し、地域貢献をしたことである。第四に、本プロジェクトの報告書を、倶知安・ニセコ町役場へ作成・提出することにより、調査結果を共有するという地域への還元を行う予定である。

ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析
プロジェクト代表者：籏本　智之

１．プロジェクトの目的・概要

北海道をベースにしている企業は同一の業種で全国を対象にしている企業，グローバルに活躍している企業に比べてどのような特徴があるのか。特に成長性，収益性および安全性においていかなる違いがあるのかを分析する。従来，ローカル企業はターゲット市場を成長に応じてリージョナル，ナショナルと広めていく中で競合との差別化を図る一方で，規模の経済を獲得してコストリーダー的な側面を持つようになる。こうした企業の成長・競争はグローバルレベルにまで急速に拡大している。そうした現在，生存しているローカル企業はナショナル企業やグローバル企業とローカル市場では競争しながらも何らかの優位性を維持しながら持続しているのである。本プロジェクトでは同一業種に属するローカル企業，ナショナル企業，グローバル企業として1社ずつ選定し，3業種の企業群を経営分析する。

２．具体的な取組内容

今年度後期のゼミ活動として，本プロジェクトを遂行した。
まず，ゼミ生14名を分析を希望する業種会社名を募り，3グループに分類した。スーパーストア業界，ドラッグストア業界，航空業界である。スーパーストア業界では，アークス，ダイイチ，イオン北海道，イオン，セブンアンドアイ，ウォルマートの6社を分析することにした。ドラッグストア業界では，サツドラ，サンドラッグ，ツルハ，ウエルシア，マツキヨ，ウォルグリーンの6社を分析することにした。航空業界では，エアドゥ，スターフライヤー，全日空，JAL，ユナイテッドの5社を分析することにした。
分析手法としては、まず各社5年分の連結財務データを入手し、財務諸表分析を行った。さらに、アニュアルレポート，有価証券報告書，雑誌・新聞記事に基づいて，市場分析と組織分析を行って、問題点を抽出し、解決策を立案した。
これらの研究は日本大学商学部で開催されるアカウンティングコンペティション2017でグループごとに発表し、また、個人別にケースレポートを執筆した。

３．プロジェクトの成果及び地域への還元

プロジェクトの成果はアカウンティングコンペティション2017で発表するとともに個人別のケースレポートを執筆したが、ケースレポートはPDFで本学WEBサイトを通じて公表する。

平成29年度 グローカルプロジェクト推進公募要領

学 長　　和 田 健 夫

１　趣旨

グローバル時代における地域（北海道）の教育研究拠点として，地球規模の視野で考え，地域視点で行動するグローカル人材の育成に資する教育研究プロジェクトを学内公募します。

２　応募者要件

本学に所属する教職員で，同一の活動計画において他から類似の助成金，共同研究費，受託研究費等を受けていない者

３　助成対象

・　第３期中期目標期間における本学の中期目標，中期計画及び年度計画の達成に資するプロジェクトに対して活動経費を助成します。特に次の中期目標の達成を視野に入れるようご留意願います。
  - 学部教育においては，豊かな教養と外国語能力を基礎とした深い専門知識を有し，グローバルな視点から地域経済の発展に貢献できる人材（グローカル人材）を育成する。【中期目標１】
  - 人文・社会系大学及び北海道におけるアクティブラーニングの先導的役割を果たす。【中期目標２】
  - 「商学」を実践的・応用的総合社会科学として認識し，社会が提起する諸問題に総合的・学際的にアプローチし解決策を提示する実学的研究を推進するとともに，総合的・学際的なアプローチを可能にする諸分野の理論研究及び基礎研究を行う。【中期目標９】
  - 北海道の地域再生・活性化を目指し，①本学が100年にわたりネットワークを築いてきた産業界，②包括連携協定を締結する北海道，北海道財務局，小樽市などの公的機関，③教育研究面でさまざまな連携事業を実施する北海道内他大学等と連携することにより，全学的な教育･研究を推進するとともに，その成果の還元を通して，地域の課題解決を担う人材を育成する。【中期目標11】
  - 本学が目指すグローカル人材の育成に資する教育研究の国際化を図る。【中期目標12】

・　本公募は，平成25年度に採択された「地（知）の拠点整備事業」におけるプロジェクト公募の発展形であり，当該事業の趣旨に鑑み，教員の教育研究活動に対する単なる予算の追加や，従来行われていた教育研究活動への補填や予算の付け替えと考えられるものは，助成対象としません。
・　本公募要領に定める実施期間内に，確実に所期の目的を達成するプロジェクトを対象に助成します。

４　助成金額及び採択予定件数

助成金額：１件あたり４０万円を上限　※
採択件数：１０件程度
※　選考審査の上，採択プロジェクトの助成金額を減額することがあります。

５　実施期間

採択日より平成３０年３月３１日まで

６　公募手続

平成２９年５月１５日（月）までに申請書（別紙１）及び予算計画書（別紙２）を**【学術情報課研究支援係】**に提出してください。

７　選考手続

グローカル戦略推進センター研究支援部門運営会議において選考審査の上，学長が決定します。

なお，過去に学内公募で採択されたプロジェクトに関しては，過去の評価結果を選考審査の際に参考とすることがあります。

８　成果報告

一般公表を前提としてＡ４一枚にプロジェクトの概要を取りまとめた実績報告書（中間報告：11月頃，最終報告：３月頃）を提出していただきます。また，プロジェクトの成果にかかる詳細なレポート，具体的な成果物，新聞報道事例等がある場合は，併せて提出してください。

９　成果公表

８で提出された実績報告書は，地域及び学生への成果還元のため，本学webサイトの他，学外・学内においてパネル展示等により公表いたします。

また，下記取組の実施の際には，別途協力いただくことがあります。

- アクティブラーニングのケースを蓄積した「小樽商大メソッド」の公表
- 文部科学省が実施するアンケートへの数値提供（各プロジェクトにおける自治体や企業との連携実績，相談件数，コストシェア実績等）
- 成果報告会開催時における成果発表

１０　評価

８で提出した実績報告書に基づき，外部有識者及び学長による評価を行います。また，評価結果は，翌年度以降のプロジェクト公募の選考審査の際に参考とすることがあります。

１１　その他

- 平成29年度は，「地（知）の拠点整備事業」の事業期間最終年度であることから，当該事業の趣旨に鑑み，特に小樽市，札幌市，倶知安町，ニセコ町及びしりべし地域における課題解決を目的とするプロジェクトを優先して採択することがあります。
- 助成対象となる授業科目及びゼミ等に関しては，プロジェクトの成果及び期待される効果を踏まえ，当該科目が地域に関する学修であることがわかるよう，シラバスへの記載に留意してください。
- 予算計画書の作成にあたっては，無理に助成金額の上限まで積み上げるのではなく，真に必要な経費のみを計上してください。
- 購入依頼書，立替払請求書，謝金支出計画書，旅行命令簿等の提出にあたっては，本学会計課が定める提出期限を厳守してください。（２月中旬頃を予定しています）
- 助成金受給者が事業を遂行できなくなったときは，助成金の支給を停止します。
- 研究費の不正使用等が発見された場合は，直ちに助成を取りやめます。

１２　本件に関する問い合わせ先

・公募手続，選考手続及び予算に関すること
学術情報課研究支援係（内線5222，lib-kenkyu@office.otaru-uc.ac.jp）
・成果報告，成果公表及び評価に関すること
企画戦略課地域連携戦略係（内線5234，cocjimu@office.otaru-uc.ac.jp）

別紙１

平成29年度 グローカルプロジェクト推進公募申請書

１．申請区分・プロジェクト名（該当する区分に■を記載してください）

<table>
<tr><td rowspan="2">申請区分</td><td>□　新規</td><td colspan="3">□　過去に採択実績あり（下記に詳細記載）</td></tr>
<tr><td colspan="4">採択年度：
プロジェクト名：</td></tr>
<tr><td rowspan="2">プロジェクトの対象地域　※</td><td>□　小樽市</td><td>□　札幌市</td><td>□　倶知安町</td><td>□　ニセコ町</td></tr>
<tr><td>□ 後志地域全体</td><td>□ 北海道全体</td><td colspan="2">□　その他（　　）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">プロジェクト名</td><td colspan="4">プロジェクト名を公表するため，一般の方に伝わるよう簡潔に分かりやすく記載してください。</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td></tr>
</table>

※　平成29年度は，「地（知）の拠点整備事業」の連携地域を対象としたプロジェクトを優先して採択することがあります。（公募要領11参照）

２．プロジェクト代表者

氏　　名	所属学科等	職　名

３.組織（協力者等の氏名を記載してください）

氏　　名	所　属	職　　名

４．プロジェクトの概要

200文字程度で簡潔に記載してください。記載内容は，採択後に本学webサイトにおいて公表します。

５．取組計画・実施方法

６．期待される成果及び成果の還元予定

７．本プロジェクトにかかる学外からの要望及び人的，物的，財政的支援等の予定

８．本プロジェクトにかかるこれまでの取組実績

各記載欄のサイズは，記載内容に応じて適宜調整をしてかまいません。

別紙２

予　算　計　画　書

科　目		申請金額 （単位：千円）	主な使途・内訳
物品費	設備備品費 ※10万円以上の物品		※事務机・椅子等の什器類、プリンタ等の基盤的な設備の購入にあたっては、プロジェクトにおける必要性について慎重にご検討ください。
	消耗品費 ※10万円以下の物品		※プロジェクト期間（当該年度内）に必要となる最小限の数量としてください。
人件費・謝金	人件費		
	謝　金		※学生への謝金支出にあたっては、授業時間中に業務を依頼することのないよう注意してください。
旅費	旅　費		
その他	外注費		
	印刷製本費		
	会議費		
	通信運搬費		
	光熱水料		
	その他（諸経費）		
合　計		千円	

平成29年度　小樽商科大学「グローカルプロジェクト推進公募」 評価シート

評価記入者		所属機関等	

※匿名性を担保した評価を実施するものであり，評価シートの記入者，所属機関等は，プロジェクト代表者には公表いたしません。

No.	プロジェクト名				
1	小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
2	地域活性におけるふるさと納税の検討				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
3	外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
4	地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
5	地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
6	小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点)，B(4点)，C(3点)，D(2点)，E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨，取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点)，B(7点)，C(5点)，D(3点)，E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
7	北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点), B(4点), C(3点), D(2点), E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨, 取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点), B(7点), C(5点), D(3点), E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
8	後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点), B(4点), C(3点), D(2点), E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨, 取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点), B(7点), C(5点), D(3点), E(0点)】
	コメント				

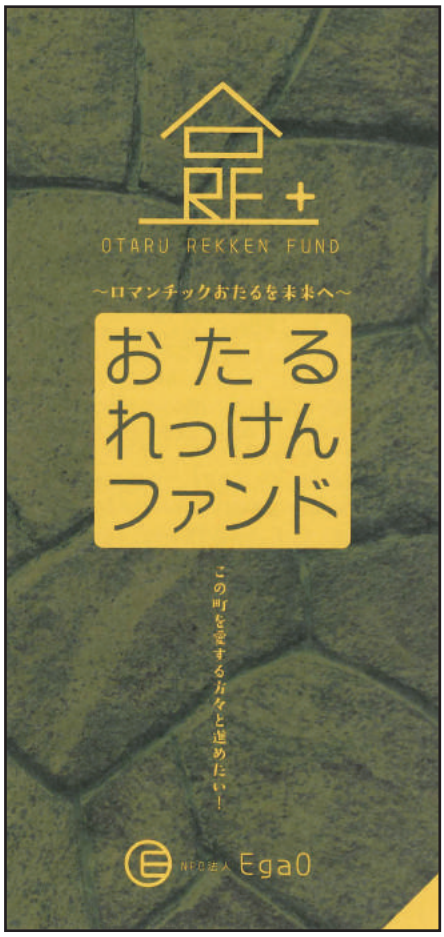
No.	プロジェクト名				
9	Lost in Translation? 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サーヴィス」の課題とその克服 ― 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」(日本語・英語)作成を含めた解決策提案も視野に入れて				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点), B(4点), C(3点), D(2点), E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨, 取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点), B(7点), C(5点), D(3点), E(0点)】
	コメント				

No.	プロジェクト名				
10	ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析				
	情報発信		← 実績報告書の記載は分かりやすく適正なものであるか 【A(5点), B(4点), C(3点), D(2点), E(1点)】	取組内容	← プロジェクトの趣旨, 取組及び成果の還元は適切であるか 【A(10点), B(7点), C(5点), D(3点), E(0点)】
	コメント				

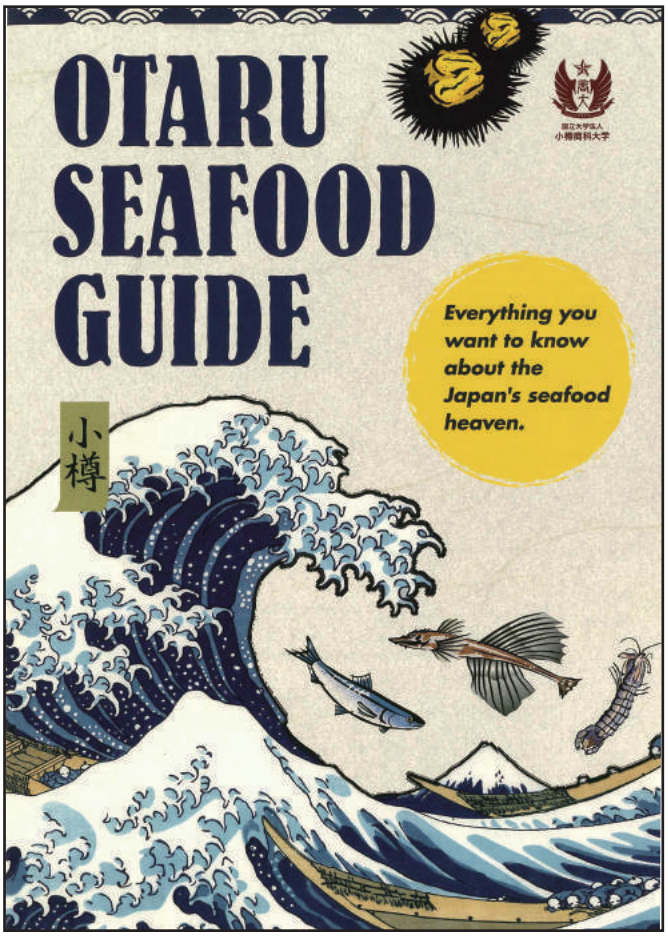
【 自由意見記載欄 】プロジェクト全体についてやプロジェクト評価の仕組みなど, 大学への要望・アドバイス等がありましたら記載をお願いいたします。

本評価シートについては, 【５月１６日(水) 】までに下記宛に提出をお願いいたします。
大変お手数をおかけしますが, ご協力よろしくお願いいたします。

【提出先】 : 小樽商科大学企画戦略課 E-Mail:cocjimu@office.otaru-uc.ac.jp FAX: 0134-27-5213



【プロジェクト①】
「おたるれっけんファンド」リーフレット



【プロジェクト③】
「OTARU SEAFOOD GUIDE」英語リーフレット

【プロジェクト⑥】 インタビュー冊子「小樽のひとに学ぶ」

【プロジェクト⑨】 英語版リーフレット
「外国人患者のための医療マップ」

【キャラクタープロジェクト】しりべしケース１５

【キャラクタープロジェクト】ご当地キャラクターシールリレー2017